考古学講座

かながわの縄文文化の起源を探るパート 2

								_											_				_											
小			論															Ī																
			-	_	_																													
	1	I					討		./-	_		222			A 60 PF	1 T		1 4						2 0			.,					·mz		٠.
			-										-	相相	莫里	于N	0.	149	力道	跡	出.	土 :	上表	\$ 0)) 冉	検	討-					澤		
										٢												-										本		
										٤ ا								明月	圣 約	良紋	土	器	の	編	年							林		
			「才	E	67	4 3	上力	- 3	\$_	0) 診	文定	21	-) V	١ -	7														户	田	哲	也
					40			144	Lo																									
	2	白					لح ا														1.													
						-				時								の	層	位	的	出	土	例								池		
				-						石																						木		郎
									-	柴						-	- 1		_												織	笠		昭
			か	な	が	わ	に	お	け	る	有	舌	尖	頭	器	及	V	石	鏃	の	出	現	時	期	13	0	11.	T			諏	訪	間	順
	_							_	00																									
	3	白								係			_																					
						-				た				-						創	期	に	0	1,	7							田		徹
			遗	跡	に	持	这	ŧ	n	た	石	器	石	材	に	つ	1,	7													諏	訪	問	伸
		• sala	D-4-	_		4																												
•	4	退	跡		-					- 1	. 1 .	44																					and a	
										時	_																					藤		
			滕	沢	币	に	お	け	3	縄	文	時	代	草	創	期	の	遺	跡	の	立	地	に	0	6	て					望	月		芳
	_	100	444	•	166	167		100	. Oak	の		- 46	,																					
į	5	旭												7 FI -	Ł I			111		.1.											1.02	12	-/4	1.
										住									0)	16.	贬 7	da r	, -	-								井		
			岭	旦	地	万	押	止	純	文	期	0)	頂	稱	۲	垣	物														池	谷	信	Z
	6	+	環	抽																														
	J	Н				n d	t the	11-	±2	Ł	+ 1	è :/	th	1 ^	0	2%	À	h -	_ [•	e a	٠ +	L.	h	11	2	. 0	4 油	となる	14 t		126	244	1	+
			取	12.5	ハガ	カイ	人妙、	16-	74	3 /		15	77	1.	. 0)	T	大	') -	- 3	ie v	9	_	')	ےاد	-(0)	己体	しる。	令才		当	渕	小山	大
	鱼	2 1	Ä	Γ t	1 1	- 1	55 A	20	0 4	電文	t Bi	丰化	+ 0) l:	t 1		‡ /	h	£												台	石	进	·
	,,	т н	-						,,,	0 /		3 1		,,,	- `	•	^	<i>'</i> -	J													76	10	_
付			編																															
14					2 1	_	D Va	, 0	. ,	- 11		. 1.		د :	1n	e -	, п		10	0.0	0	0	١.,					ch.			,	_		
								_						_			_					_		•		会の	クロ	谷				石		_
		1	1, 7	こか	1	0	り総	もヌ	į į	t 11	50)走	己》	2 5	书	K &	5]	(16	196	. 3	. 3) =	黄言	平						岡	本		男

1996

神奈川県考古学会

かながわの縄文文化の起源を探るパートⅡの刊行について

1996年3月3日に開催されました「かながわの縄文文化の起源を探る」に、多数のご参加をいただきましてありがとうございました。当日は250名の席を用意しておりましたが、座りきれない状況で、主催者として誠にありがたく思っています。

本書「パートⅡ」では、当日討議された内容は要旨のみをまとめておくに止め、パネラーないしコメンテイターの皆さんに、当日の主要な論点を中心とした原稿を新たに書いていただきました。

かながわでの縄文文化の起源を探る問題は、決して県内に止まるものではありません。日本の縄文文化初頭の様相を解く鍵になれば望外の喜びとするところです。

ご多忙中のところ原稿をお寄せいただきました方々には御礼を申し 上げます。

1996年10月

神奈川県考古学会

考 古 学 講 座

かながわの縄文文化の起源を探るパート 2

小論	
1 土器の再検討	
	村澤正弘
上野遺跡の層位と土器	坂本 彰
境川下流域を中心とした縄紋時代草創期隆線紋土器の編年	小林謙一
「花見山式土器」の設定について	户田哲也
	, , , ,
2 石器の組成と様相	
長堀北遺跡縄文時代草創期遺物群の層位的出土例	小池 聡
相模野台地の細石刃文化の終末	鈴木次郎
長者久保・神子柴文化と相模野的神子柴文化	織笠 昭
かながわにおける有舌尖頭器及び石鏃の出現時期について	諏訪間順
	, , , , , ,
3石器と石材との関係	
使用石材から見た旧石器時代と縄文草創期について	柴田 徹
遺跡に持込まれた石器石材について	諏訪間伸
4 遺跡の分布	
かながわの縄文時代草創期の遺跡分布	加藤勝仁
藤沢市における縄文時代草創期の遺跡の立地について	望月 芳
5 遺構の種類・遺跡の性格	
草創期遺構と定住化-南関東と南九州の比較から-	桜井準也
駿豆地方押圧縄文期の遺構と遺物	池谷信之
6 古環境	
最終氷期末期に起きた寒冷期への逆戻り=「寒のもどり」とその急激な終末	增渕和夫
	人 丁 川 占
解説「かながわの縄文時代のはじまり」	白石浩之
付 編	
『かながわの縄文文化の起源を探る』(1996.3.3)討論会の内容	白石浩之
『かながわの縄文文化の起源を探る』(1996.3.3)講評	岡本 勇

1996

神奈川県考古学会

目 次

小	論	
	1 土器の再検討	
	隆線文土器以前の土器-相模野No.149遺跡出土土器の再検討-	(村澤正弘) 1
	上野遺跡の層位と土器	(坂本 彰) 7
	境川下流域を中心とした縄紋時代草創期隆線紋土器の編年	(小林謙一) 13
	「花見山式土器」の設定について	(户田哲也) 16
	2石器の組成と様相	
	長堀北遺跡縄文時代草創期遺物群の層位的出土例	(小池 聡)20
	相模野台地の細石刃文化の終末	(鈴木次郎) 24
	長者久保・神子柴文化と相模野的神子柴文化	(織笠 昭) 27
	かながわにおける有舌尖頭器及び石鏃の出現時期について	(諏訪間順) 32
;	3石器と石材との関係	
	使用石材から見た旧石器時代と縄文草創期について	(柴田 徹)36
	遺跡に持込まれた石器石材について	(諏訪間伸) 39
	4 遺跡の分布	
	かながわの縄文時代草創期の遺跡分布	(加藤勝仁)42
	藤沢市における縄文時代草創期の遺跡の立地について	(望月 芳) 45
	5 遺構の種類・遺跡の性格	
	草創期遺構と定住化-南関東と南九州の比較から-	(桜井準也)48
	駿豆地方押圧縄文期の遺構と遺物	(池谷信之) 51
	6 古環境	
	最終氷期末期に起きた寒冷期への逆戻り=「寒のもどり」とその急激な終ぇ	末(增渕和夫)54
1	解説「かながわの縄文時代のはじまり」	(白石浩之)58
付	編	
	『かながわの縄文文化の起源を探る』(1996.3.3)討論会の内容	(白石浩之)62
	『かながわの縄文文化の起源を探る』(1996.3.3)講評	(岡本 勇) 65

隆線文土器以前の土器 - 相模野No. 149遺跡出土土器の再検討 -

村澤正弘

1. プロローグー寺尾式土器は花見山1式と同一時期と考えてよいか。

「隆線文土器以前の土器」という言葉は随分と抽象的な名前である。花見山式土器のように隆線を装飾として貼りつける一群の土器がいわゆる隆線文土器であって、寺尾遺跡や相模野第149遺跡にみられる口縁部を肥厚させ、幅広隆線のように見える文様帯を作り出した「肥厚口縁土器」を主体とする土器をここでは指す。これは白石浩之氏が「押圧文土器」、栗島義明氏が「刺突文土器」、大塚達朗氏が「斜格子目紋土器・窩紋土器」、林謙作氏が「刻紋土器・窩紋土器」と呼称しているものと同じである。大塚達朗氏はこれらの土器の一群を総括して「肥厚系口縁土器型式」を提唱し、「隆線文系土器型式」と区分している。呼称の問題については、講座では論議されなかったが、いずれも当該期の土器の特徴を表記している。筆者は『大和市史1』で「隆線文系土器型式」を二分し、後半期をいわゆる隆線文土器を主体する一群の土器、前半期をそれ以前の土器(肥厚口縁土器)を主体とする一群の土器に分けている。その前半期に該当する(註1)。

最古の土器をめぐる問題は、層位関係と共伴する石器構成からなされてきたことはまぎれもない事実である。よく「土器は石器から」という表現をするが、これは大きな誤解の表現である。土器研究者は縄文土器編年を組むにあたって、少なくとも層位関係によって大枠の新旧序列を行い、方向性を見い出し、文様帯系統論によってより細かい細分化をなしてきた。つまり「土器は土器から」の論理である。一方、石器研究者は「石器は石器から」同様に行っているわけで、それぞれの研究が層位関係を基本に据えて、共伴関係と資料蓄積とによって「土器は土器」「石器は石器」の序列関係を推論している。当該期は旧石器時代研究においても石器が非常に短期間に変化する時期である。石器という実用性の高いことを加味しながら特定地域内の土器の序列に石器を利用することは、時代の編年を考える上では必要なことであり、欠くことのできないことではないだろうか。土器からの推論、石器からの推論が一致してこそ、真に時代編年の正当性が得られるはずである。

筆者らと坂本彰氏とでの論点は、「隆線文土器より以前に土器はあるのか否かという問題」ではなく、「寺尾遺跡・相模野第149遺跡等の土器が花見山1式の範疇で解決できるか否か」である。『花見山遺跡』の報文中に寺尾遺跡・相模野第149遺跡出土土器を花見山1式とする根拠を述べている。この中には、筆者らが主張する、隆線文土器以前の土器は肥厚口縁土器であるという、大きなの特徴については語っていない。そして、相模野第149遺跡の土器は「口縁外側に貼付した粘土帯の下端が隆線状に浅く盛り上がっている。その上面は口縁端と共に右上方向より刺突されて2本の直行隆線が形成され、また下部にも同様な隆線の一部かと見られる痕跡がみとめられる。」とされているが、とても隆線の存在は筆者には確認できない。みとめられるという刺突文によってできあがった隆線状の盛りあがりをもって2条の直行隆線がめぐる土器と考え、それに相応した形で寺尾遺跡の刺突・押圧は隆線間を充填した文様構成であると把握している。筆者には、無理に隆線の存在を捻出しなくとも粘土帯

そのものを文様帯とし考えればすむと思われ、寺尾遺跡のそれはその文様帯内を充填する刺突とすればすっきりすると思われる。花見山1式の段階に組み込むためにはどうしても直行する2条の隆線の存在を生み出さなければならないわけで、到底坂本氏のいう隆線が見いだされないからには別段階の土器と認識する必要があると思われる。さらに坂本氏は「相模野第149遺跡の刺突文の中には刺突方向が異なり、ハの字状になった部分が見られる。」とし、ハの字文の原形候補としているが、実物にはそのような箇所は確認できない。また、上野遺跡第1地点第1文化層(花見山2式)と同遺跡第1文化層(いわゆる隆線文土器以前)の層位関係から考慮すれば、第1文化層が花見山1式でないことから隆線文土器以前にする必要性はない。という「上野遺跡第1地点の層位的事実」に触れているが、ならば花見山1式にする必要はないと言おう。さらに伴出石器の問題に触れ、講座資料の写真図版第8図で石器では土器編年は述べられないことを指摘している。しかるに坂本氏は報文中で花見山1・2式と3式との新旧関係を決めるにあたって、先土器時代的要素をもった伴出石器と縄文時代的要素をもったそれとで判断している。

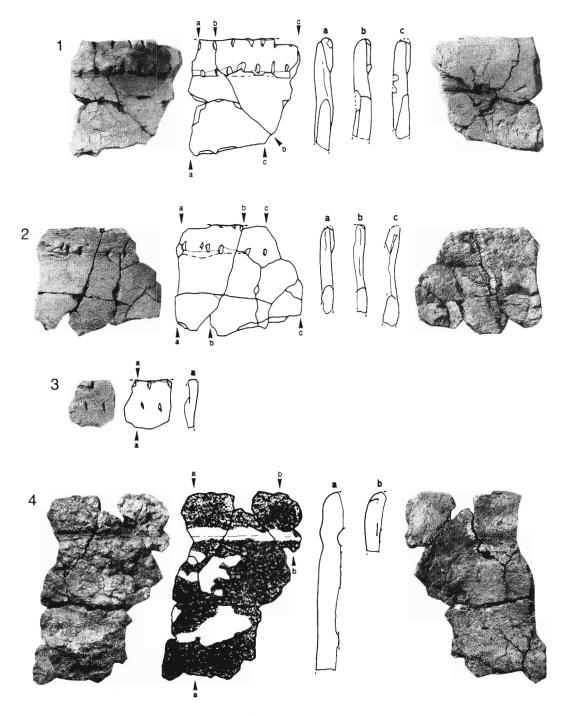
肥厚口縁土器は、(1)口縁部に見られる幅広隆帯ごときものは土器成形として作出したもので、器面に隆線を飾りつけるという二次的行為として貼付したものではない。(2)土器の器厚は約0.8cmで厚みがあり、隆線文土器の約0.5cmに比べ厚みがある。(3)胎土中には植物繊維もしくは獣毛が意図的に混入されている。(4)概して、隆線文土器に比べ洗練されていない。講座では、(2)・(3)は隆線文土器にも存在することが指摘されている。このことは筆者も認知いるが、総体的にみてという意味である。(4)に至ってはあまりにも抽象的であるが、胎土の洗練さや器形の整形などいくつか指摘することができる。しかるに花見山1式の土器と比較した場合、(1)以外に明瞭な区分をすることはできない。といって、(1)の特徴は花見山1式と2式、2式から3式の区分基準からすれば大きな違いであり、花見山1式の中に収めることには不自然と思われる。少なくとも肥厚口縁土器の一群は花見山1式から分離させるべきであろう。

相模野第149遺跡の土器は、栗島氏も指摘するように隆線文土器に入れるか否かで苦慮する。それは肥厚口縁土器から隆線文土器への移行のカギを握る土器ということでもある。筆者が『大和市史1』の図で相模野第149遺跡の位置を隆線文系土器型式の前半期と後半期の過渡的位置にした理由の一つでもある。筆者は、(1)肥厚口縁の作り出しが隆線文土器の隆線の貼りつけという意図によるものではなく、口縁部作出という意志に基づいていること。(2)複数の単独隆線によって文様帯を生み出していないことをもって相模野第149遺跡の土器は隆線文土器以前の中で捉えたいと思う。したがって寺尾遺跡や多摩ニュータウンNo.796遺跡の土器も当然のことながら降線文土器以前の段階に入ることになる。

註1:前半期の土器群について、大塚達朗氏が提唱する一型式群である「肥厚系口縁部土器」(私自身は肥厚口縁系土器としたいのだが)という呼称は評価したいと思う。

2. 相模野No.149遺跡出土土器の再検討

土器編年で、相模野No.149遺跡出土土器として壇上に出てくるのは第1図-1の土器片である。し



第1図 相模野No.149遺跡出土土器(S=1/2)



第2図 相模野No.149遺跡出土土器 個体1口縁部文様帯(S=1/1)

かしながらこの1片の土器だけで当該土器みると、大きな間違いに陥るはずである。まず最初に述べ ておこう。第1図-1~3は同一個体である(個体1と呼ぶ)。この3点は口縁部を残す土器片で、文 様だけをみると別個体として把握してしまう土器である。しかしながら、胎土の観察や刺突痕の原体 観察等からみてまちがいなく同一個体である。また、それぞれの位置関係は、1と2との距離は多少 あるものの、2と3は裏器面の観察などから非常に近い距離にある。第1図に掲げた土器片について、 断面の状況を観察するためにセメダインによって接合してあるものについてはアセトン溶液で離して、 断面観察をし、1・2に関してはそれぞれ3カ所の断面図を作成した。高々5cm角程の土器片ではあ るが、同じ個体とは思えないほど異なっていることが確認できるであろう。とにかく中途半端な土器 である。この肥厚口縁は1では明確に段差を設けている。しかしながら2の断面2aでは帯が確認で きるものの、2bや2cでは確認できない。ましては3に至っては跡形もない。有段の帯はれっきと した文様帯を構成する題材ではないのである。そして1の帯下端にヘラ状工具によって1条のナデの 痕跡が観察できるが、このナデの痕跡は帯が消滅している2や3にも存在するのである(第2図)。こ れは何を意味するのであろうか、一つには疑似隆帯は口縁部を一周するのではなく、帯を有する部分 と無い部分が交互にみられる文様構成をなすという考え方、もう一つは視覚的には隆帯ではあるがそ うではなく偶々隆帯状になってしまった口縁部の一部であり、作者の意図したところは口唇部端の刺 突と一条の刺突列であったという考え方である。これはこの疑似隆帯が土器成形時に作出したもので あり、文様作出時に貼付したものでないこと。そして隆帯部がない2や3にも隆帯部から続く一条の ナデによって文様帯が作り出されて、刺突列によって区画されていることから、筆者は後者と考える。 なお、1a・2a・2bの断面中にみられる縦の断続的な亀裂はおそらく土器製作時の粘土帯作成 時に表側と裏側とで異方向に引き伸ばして平坦にした結果として焼成後に亀裂や空洞化が生じるので ないかと推測している。2cや3aはその空洞や亀裂によって崩落してしまった部分なのであろう。

第1図-4の土器片は第1図-1~3とは異なるもう一つの個体である(個体2と呼ぶ)。調査時のバインダー処理によって表面観察は非常に困難を要する。特に断面観察においては致命傷である。かろうじて後世の接合によって写真右上の土器片に関しては処理がされていないので断面観察が可能である(断面4b)。器面の残存状況は、裏面は良好であるものの、表面はその大半は崩落している(図版網部分)。このような状態であるため、個体1との比較を通して復元してみよう。(1)裏面から表面への口唇部のカーブの状況と胴部残存部との器厚関係から口縁部は肥厚していたと判断できる。なお、この口縁にみられる肥厚は個体1と同様に成形時に作出されたものである。(2)肥厚口縁部の下端には先端が曲状の工具による二度引きによって、沈線が巡っている。個体1のナデと違って意識的して沈線化されたものである。(3)刺突文等に関しては残存部分では確認できない。口唇部のカーブからみて、刺突文があったとしてもその部分は崩落してしまったと十分いえる範囲である。しかしながら、個体1と比較してみると、残存する口唇部端には刺突によってできる粘土の盛りあがりが全くみられない。したがって、少なくとも口唇部には刺突はなかったと判断できよう。これらのことから、個体2は下端を沈線によって区画した肥厚口縁土器で、肥厚部の文様は不明ではあるが、上端・下端には

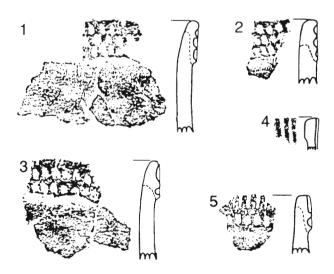
刺突文はないと推定できる。

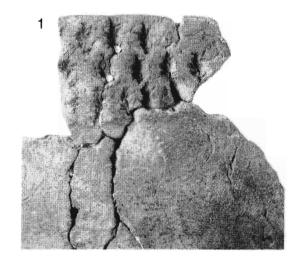
このように2つの個体の土器について述べた。編年的の捉えるならば、個体2から個体1への推移を考えたい。根拠として、(1)個体2は沈線によって口縁部文様帯の区画がなされた、明瞭な肥厚口縁を作出している、(2)個体1は刺突が文様帯の上端および下端に限定され(この文様帯とは口唇部端から一条の横走するヘラナデ間をいう)、肥厚口縁という意匠の意図が崩れている、ことからである。個体2の前段となるのは寺尾遺跡・多摩ニュータウンNo.796遺跡の土器であることは言うまでもない。

なお、相模野第149遺跡の胎土分析による産地推定は、『市兵衛谷遺跡・新道遺跡』でなされている。また、『綾瀬市史研究 3』でも同じ内容で発表されている。報文中には明記されていないが資料No. 30・32は個体1、資料No. 29・31は個体2である。それによれば、個体1は変成岩地域からの搬入、個体2は在地的土器であると言う(註2)。

個体1の土器に触れて、隆線文土器およびそれ以前の土器を通してみると、作成意図がしっかりしている反面、個体1のように言ってみれば不可解で中途半端な土器がかなりの割合で見られることは注意すべき点である。特に肥厚口縁土器に至っては大半がそうである。寺尾遺跡の個体も例外ではなく、3列押圧と2列押圧の土器は同一個体であり、栗島氏もすでに指摘し(1988)、白石氏も推論している(1996)。これは第3図をみてわかるように一つの土器片の中に押圧があるべき場所にないことや胎土・整形痕などの比較からいえる。また、隆線文土器にあっては、隆線の本数が突然増えたり減ったり、隆線がとんでもない方向へ延びたりとあげればきりがない。これらの存在からもわかるように当該期の土器の特異性と難しさを知ることができるのである。

註2:同一個体であるNo.29と31の岩石組成(論文第5図)を比較すると、内容に大きな違いが認められる。No.29は三浦半島海老田川河川域、No.31は相模野河川域という分析結果である。つまり、同一個体であっても箇所によって大きく異なるデータがでてしまっている。また、在地の範囲を三浦半島まで含めているが、考古学的視点からすればとても在地とは言えない。さらにNo.30・32は変成岩地域(三波川帯~秩父帯?)としているが、三波川帯~秩父帯や丹沢山地周辺河川域の砂試料の岩石組成の提示が必要に思える。そして相模野No.149遺跡近辺の河川砂試料がないことは大きいと言わざるを得ない。分析細部については問題点があるものの、肉眼観察からみても個体1と2の胎土は全く異なるわけで、同じ遺跡から異なる胎土による土器が共伴することは事実である。改めて個体2の器面剥離が惜しまれる。





第3図 寺尾遺跡出土土器(S=1/2) 右の写真は1の土器片の部分(S=1.5/1)

3. 相模野台地および周辺地域における隆線文土器以前の変遷

『花見山遺跡』で坂本氏は、花見山2式土器の豊富な資料分析に基づいて5つの文様形態を設定した。 a 類(隆線のみ)、 b 類(隆線+ハの字文)、 c 類(ハの字文)、 d 類(無文)、 e 類(斜格子文)である。これらの形態は、1 式の段階にも認められるとし、相模野第149遺跡は a 類、寺尾遺跡は c 類、多摩ニュータウンNo.796遺跡は d・ e 類に位置づけ、1 式の中で解決している。1 式の中に含むことの異論については先に触れた。文様の系譜については、白石氏が1990年に沈線文の系列(寺尾・相模野149・多摩796)・刺突文の系列(寺尾・相模野149)・縄文の系列(寺尾)・貼付文の系列(泉福寺)・無文(上野1)に分けている。筆者はこのような文様形態の分類化には大いに賛同したい。当地域においての縦の序列は寺尾・多摩796→(相模野149個体2)→相模野149個体1が考えられる。隆線文土器の隆線の系譜がどこにあるかを断定するのは難しいが、肥厚口縁(幅広隆帯)が隆線へという公式には賛同しがたい。したがって筆者は、坂本氏の花見山2式段階の五分類を加味して寺尾段階を縦覧した場合、b 類を a 類と c 類の複合体と考えて削除し、 c 類を刺突文とすれば c ~ e 類が継続していると考えられるであろう。 e 類の斜格子文はしいて言えば沈線文のさらなる細分したもので、沈線文と考えれば、白石氏の刺突文・無文・沈線文の文様分類は存在する。それぞれは文様帯を区画する際と文様帯内に施文する際に使用される。白石氏はこの三系譜の他に縄文と貼付文を設定しているが、縄文については、『考古学研究 42-4』での寺尾遺跡の土器分析結果および後続する隆線文土器の文様分類から考えて、ないと思われる。貼付文については多摩ニュータウンNo.796遺跡の中に1 点存在する。この1 点の土器片ち当該期の土器毎年を考える上で重要な役割をする。しかしながら小片であり1 占という中での

ないと思われる。貼付文については多摩ニュータウンNo.796遺跡の中に1点存在する。この1点の土器片も当該期の土器編年を考える上で重要な役割をする。しかしながら小片であり1点という中でのコメントは避けたい。この貼付文が隆線と結びつけば、坂本氏の提示する文様分類は間違いなく寺尾段階まで溯っているといえよう。

柴田徹氏には、日頃より土器の岩石組成などに貴重なご教示を得ている。改めて謝意を申し上げる。

参考文献(主要なものに限る・刊行年代順)

栗島義明「隆起線文土器以前一神子柴文化と隆起線文土器文化の間」『考古学研究 35-3』 考古学研究会 1988

村澤正弘「縄文時代-定住生活の確立と土器文化」『大和市史 1』大和市1989

栗島義明「刺突文土器に就いて一窩紋土器への疑問」『利根川 11』 利根川同人1990

白石浩之「本ノ木遺跡の意味するもの一縄文時代草創期研究の視点」『神奈川考古 26』神奈川考古同人会1990

大塚達朗「窩紋土器研究序説(後篇)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 10』東京大学文学部考古学研究室1991

鈴木正博「寺尾式土器の再吟味(前篇)一大塚達朗「窩紋土器研究序説(前篇)」の思惑違」『古代 92』早稲田大学考古学会

林 謙作「縄紋土器の範囲」『シンボジウムl 環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会1993

坂本 彰『花見山遺跡』財団法人横浜市ふるさと歴史財団1995

河西 学「市兵衛谷遺跡第Ⅱ群土器の胎土分析」『市兵衛谷遺跡・新道遺跡』綾瀬市教育委員会1995

矢島國雄・他「縄文時代草創期土器の製作技術分析(1)」『綾瀬市史研究 3』綾瀬市1996

白石浩之・他「寺尾遺跡第 I 文化層出土土器の再検討」『考古学研究 42-4』考古学研究会1996

埋蔵文化財センター調査研究部「多摩ニュータウンNo. 796遺跡」『文化財の保護 28』東京都教育委員会1996

上野遺跡の層位と土器

坂本 彰

1. 「隆線文土器以前」の土器

去る3月3日の神奈川県考古学会講座において、村澤正弘氏は勝坂・上野・寺尾・相模野149・北原遺跡の土器が「隆線文土器以前」に位置することは「もはや揺るがすことのできない事実」と断定した(村澤1996)。その根拠は、

- a. 土器の文様作出法が異なる
- b. 石器が神子柴・長者久保文化の中にある
- c. 上野遺跡の無文土器は隆線文土器文化層の下から出土した

の3点に要約される。ようするに土器・石器・層位のいずれも、前記5遺跡の土器が隆線文土器以前 にさかのぼることを示しているという。

次いで丑野毅氏と共に寺尾遺跡の土器を再検討した白石浩之氏は、かつて本ノ木式併行とみた「寺尾式土器」こそ、「縄文土器の中で最も古期の有文土器」であると発表した(白石・丑野1996)。周知のように寺尾遺跡の土器を隆線文土器以前と位置付けたのは栗島義明氏(栗島1988)なので、結果的に報告者はその見方に従ったということになる。寺尾の土器は先の村澤報告でも最古段階に置かれており、それを補強するかのようなタイミングであった。すなわち「5遺跡の土器は隆線文土器以前」、「その最古段階は寺尾式」という図式である。この図式は相模野台地を主なフィールドとする研究者の意見を代弁するもので、当日も村澤・白石両氏の意見に異をとなえた相模野の研究者はいなかった。しかし私はこの見解に疑問をいだいている。上記3点のうちで、aについてはきわめて少数の土器の様相を1時期と把握する一方、土器の個体差を考慮に入れていない。bについては、神子柴・長者久保文化の内容と変遷がそれほど整備されているとは思えない。以上のa・bとも遺物の問題であるが、それに対してcは遺跡の問題である。これは「隆線文土器以前の土器」の存在を示す層位的出土例として、新潟県壬遺跡と共に重要な位置を占めている(栗島1995)。そこで小文は、この点を中心に

2. 上野遺跡の2つの文化層

少しく検討してみたい。

大和市上野遺跡は相模野台地の東を限る境川の支流、目黒川の西岸に位置している。遺跡は道路によって南北に二分され、北側の第1地点は大和市教育委員会、南側の第2地点は玉川文化財研究所によって調査された。計3冊の報告(戸田・相原1984,相田・小池1986,内藤・相田1989)を要約すると、下記のとおりである。

a. 第1・2地点の第I文化層(FB中部)からは隆線文土器計10個体が出土し、槍・掻器・斧・刺槍 (有茎尖頭器)・錐などを伴なっていた。土器の編年的位置は、多摩426・黒川東遺跡などより後出 の段階である。

b. 第1地点の第II文化層(FB最下部~ソフトローム上部)は、槍・細石器・ナイフ・斧・掻器などから成る石器群で、無文土器1個体が伴なっていた。これらはaと「明確に層位的に分離され」、「隆起線文土器群に先行する」「土器発生期の土器群」で、「共伴する石器群から、その中でも、古い段階」「細石刃石器群が終末を迎え、神子柴・長者久保石器群の時期に至る過渡期」と位置付けられる。

第1地点の報告は2つの文化層が別であるとの前提にたっており、両層を重ねて図示したものがない。第 I 文化層の東端と第 I 文化層の南西端とは、 $3\sim6$ m離れている。しかし第 I 文化層の場合は、数~I0数m離れた両地点の土器群が同一と強調されているのだから、全体的にみればさほどかけはなれたものとはいえない。両層の土器の分布および個体別資料を、同一図面に整理したのが第 I 図である。ただし同一条件とするために、第 I 地点の層位中に第 I 次調査および第 I 2 地点で引かれている I B と漸移層との境界線(破線)を加え、また南北断面を東西断面の下に移し、参考として花見山遺跡の層位図を付した。なお各個体番号の位置は、それぞれの最集中箇所を示している。

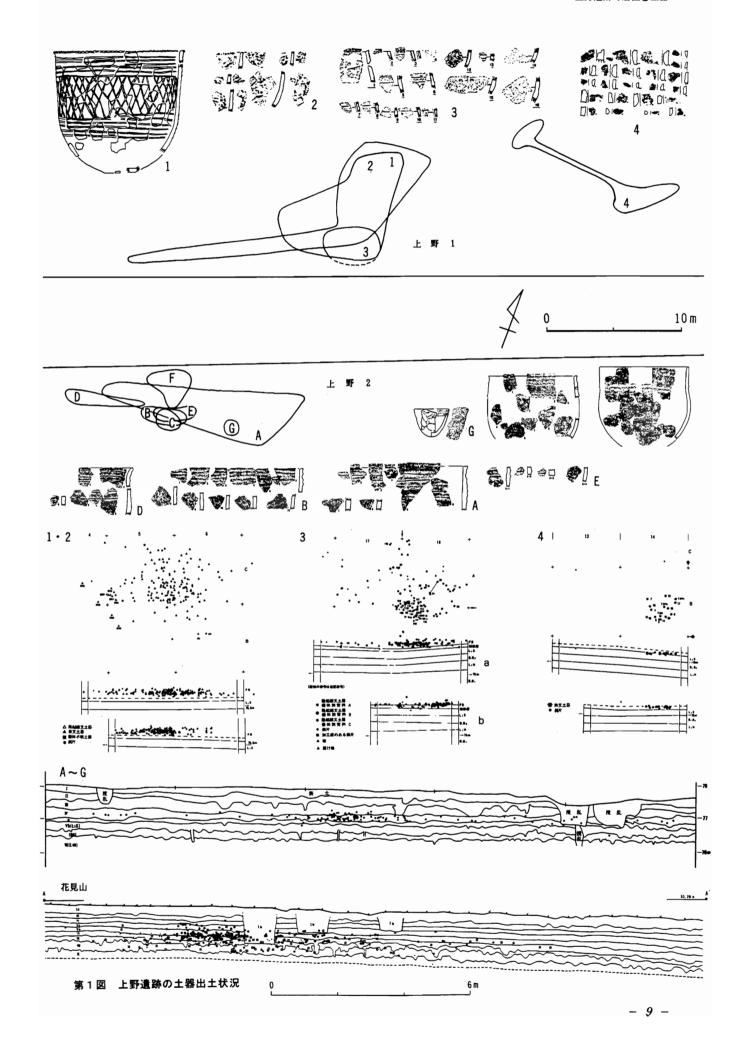
第1地点では第I文化層から3点(仮に4次調査分を3として、個体 $1\sim3$)、第I文化層から1点(仮に個体4)、計4点出土した。第2地点では7点(個体 $A\sim G$)出土しており、個体別不可能な破片をのぞくと、合わせて11個体の土器がある。ただし個体2は、個体Fと同一の可能性が指摘されている。以上のうち個体 $1\sim3$ ・ $A\sim G$ の10点が隆線文土器、個体4のみが隆線文土器以前に位置付けられている。

土器の平面分布はほぼ10m前後の間隔をおいて、個体A~G・1~3・403か所に大別され、全体として東南に開く弧状を呈する。各個体の分布は数~10m前後の範囲におさまるが、個体10みは20m以上離れている。個体4はやはり10m前後はなれて東西に集中部があり、個体2・Aと相似た状況を示す。ところで個体1~3・D・Fの集中部をよくみると、石器の共存は思いのほか少なく、むしろ土器のみが固まっている。こうした特徴は個体4でも同様で、あたかも石器とは別のブロックをなしているかのようにみえる。

層位の点では、個体A~GはあきらかにFB(IV層)が中心で、一部が上の暗褐色土・下の漸移層からソフトローム上部まで及び、個体B~Fの集中部の上下幅は50cm前後に達する。個体1・2は30cm前後の上下幅があり、FB下部に集中して漸移層に及んでいない。個体3は30cm前後の上下幅で、FB下部を中心に一部漸移層に及んでいる。個体4の東側集中部の上下幅は約10cmで、主体は漸移層にあり一部がソフトローム最上部に及ぶ。西側集中部と他の小片は、漸移層とソフトローム最上部に位置している。ようするに個体4の主体包含層はソフトロームではなく、漸移層にあったことが明白である。

3. 第Ⅱ文化層の土器

報告を素直にみると、個体4は他の個体よりわずか下に位置するが、他の個体との間に明確な層位 差はみとめがたい。とくに異型式とされる個体4と3の差は、南北断面をみる限り同一型式である個



体1・2と3の差よりも小さい。層位差が型式差に置き換えられる好例としながら、同一型式中の層位差の方が大きいのは矛盾である。1ブロック内・1遺跡内においても、土器の層位的分布幅がかなりあることは前述のとおりである。したがって個体4も遺跡内においてとびはなれた存在ではなく、こうした幅の中にいれて理解すべきであろう。すなわち個体4は、他の個体と関連をもつ土器群の一つとして把握しうるのである。

このように余り層位差をもたない個体 4 がなぜ他よりも古く位置付けられたかといえば、どうみても「共伴する石器群」が先土器時代後期~縄文時代草創期の器種を含んでいるからに他ならない。この石器群の主体はソフトローム上部に位置するが、上下幅は $50\sim90$ cmにも達している。その一部が土器群の散在部と混在するがゆえに、土器と石器は共存となったのである。そして石器群の様相が個体 $A\sim G\cdot 1\sim 3$ に伴なう石器群より古いと判断されたので、個体 4 は「隆線文土器以前」というわけである。

しかしこれらの石器群自体、大きな問題を含んでいることが指摘されている(鈴木1988)。こうした 混然とした石器群の様相によって、土器の古さが定められてよいのだろうか。

このような層位状況はまた、目黒川対岸の相模野第149遺跡と極めてよく類似している。同遺跡の第 II 群石器・土器群の上下幅は50~60cmにもおよび、ビーナス曲線の最大値は漸移層~ソフトローム最上部にある(鈴木1989)。ところがこのような位置を、相模野の研究者は「ソフトローム中」または「L1S層」と表現する。たしかに一部ソフトロームに及ぶがそれはむしろ従であり、主体はどうみても漸移層としかいいようがない。しかし「ソフトローム」と表現すれば、相模野149は寺尾・上野II・勝坂・長堀北は同一の文化層とみることができる。つまり層位の内容は余り検討されず、「隆線文以前」という位置付けにつながっているのである。

一方こうした幅広の層位でありながら、これらは結局「ソフトローム層」(白石1996)として一括評価されている。相模野台地のソフトローム層はおおむね $30\sim50$ cmの厚さがあり、層中の土器は3段階に細分(村澤前掲)されている。しかしそこでは、きわめて重要な上野遺跡の層位がとり入れられていない。上野 I とII を層位によって型式区分するのであれば、同じ方法によって寺尾・相模野I49・勝坂45A・長堀北なども細分するのが至当ではあるまいか。

なお第Ⅱ文化層の位置付けについて、「細石刃石器群終末以後」で「神子柴・長者久保石器群に至る過渡期」と報告されている。これは文字どおり解釈すれば「神子柴・長者久保石器群以前」ということに他ならず、神子柴・長者久保文化以前に土器が存在したと提唱しているのである。ところが前掲のように、個体4は神子柴・長者久保文化に伴なうとされているのは不可思議である。

4. 第 1 文化層の土器

個体4が隆線文土器以前とされるもう一つの根拠は、それ以外の個体が「隆線文土器」として一括されているところにある。第2地点を報告した戸田哲也氏は、「極めて少量の土器量、あるいはまとまりあって出土した遺物群などについて、数時期に分離することは、草創期初頭段階の遺跡において

は極めて困難」と考え、「一遺跡の範囲で発見された土器群は同時期もしくは近接する時期の所産であると仮定すること」を「分類・検討」の「前提」とした。その結果個体A~Gを同一段階と認識し、多摩 $426\rightarrow$ 上野第2地点 \rightarrow ナスナ原 \rightarrow 花見山という4期区分を提唱した。戸田編年の考え方と骨子はその後も基本的に変わっておらず、広福寺・ハケ上・三ノ宮などを各段階に付け加えたIV期編年が公表されている(戸田1993)。

それに対して第1地点の報告は、編年的位置付けについては「慎重に検討していきたい」と言葉を選んでいる(相田・小池前掲)。しかし村澤論文にみるとおり、両地点の土器は第1文化層としてくくられ、第2地点の成果を肯定した結果となっている。「古くて少量だから、一遺跡の土器は同一時期」という前堤が、「同一文化層は同一型式」という結論につながっていく。それは土器と土器の「比較」という縄文土器の型式細分方法(山内1964)よりも、明らかに「層位」を優先する見方といえよう。

しかも前述の戸田編年において、また個体B・C・Fを第Ⅱ期、個体1・Dを第Ⅲ期とした大塚編年(大塚1990)においても指摘された上野以前の隆線文土器の存在が、今日でもまったく視野に入れられていない。なぜ多摩426・黒川東や、大塚編年Ⅰ期の段階が考慮されないのだろうか。そこにはやはり土器の検討という視点が欠落し、当初から別物という考え方があるように思われる。伴出石器の違いはこの考え方を強めこそすれ、弱めるものではなかったのであろう。

仮に報告どおり個体1などを同一型式と見、無文土器を「隆線文土器以前」とすると、個体4は多摩426・黒川東よりも以前ということになる。ところが多摩426遺跡の主包含層は漸移層で、上野遺跡の個体4と何ら変わらない。層位を根拠とするのであれば、この両者は違う層位から出土しなければならない。台地が異なるといえばそれまでだが、それでは相模野は孤立してしまい、他地域との比較が不可能となろう。

5. 小 結

以上のように上野遺跡の無文土器(個体4)を、層位を根拠に「隆線文土器以前」と位置付けることには賛成できない。したがって同じ根拠による、他4遺跡の土器の位置付けも同様である。相対的な層位の違いが必ずしも明確ではない現状においては、やはり土器自身の比較を基準として新古を探って行くべきであろう。関東地方の平地遺跡において唯一の層位的事例という重要性からみて、上野遺跡の層位と土器は今後も再検討されなければならない。

私は花見山遺跡の例をもとに、細隆線を持つ個体C・Fを花見山2式段階、微隆線を持つ個体1・3・A・B・D・Eを花見山3式段階と考えている。個体Gはそのいずれかに属するであろう。また個体4は文様の存否は不明だが、その他の特徴から花見山1式段階に位置づけた(坂本1995)。

このように出土土器の内容を把握し直すと、上野は相模野台地で唯一隆線文土器の各段階が存在する遺跡といえる。そこから上野は多摩丘陵・下末吉台地における花見山と同様に(坂本1996)、相模野台地の拠点的な集落と評価される。これは地域史の視点からはきわめて重要で、あらためてその存在意義が問われることになろう。

小文作成にあたり、御教示いただいた相田薫・戸田哲也・村澤正弘各氏に深謝いたします。

参考文献

相田 薫・小池 聡「第 I ・ II 文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点』大和市文化財調査報告書21 大和市教育委員会1986 大塚達朗「窩紋土器研究序説(前編)ー肥厚系口縁部土器群とその変化ー」『東京大学考古学研究室研究紀要 9』東京大学文 学部考古学研究室1990

栗島義明「隆起線文土器以前一神子柴文化と隆起線文土器との間一」『考古学研究 35-3』考古学研究会1988

栗島義明「日本列島における移行期の文化一神子柴文化が移行期に果たした役割ー」『国際シンボジウム「東アジア・極東 の土器の起源」』東北福祉大学1995

坂本 彰『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X VI (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター1995

坂本 彰「槍と土器一都筑における縄文時代草創期の遺跡一」『考古論叢神奈河 5』神奈川考古学会1996

白石浩之·丑野 毅「寺尾遺跡第 I 文化層出土土器の再検討」『考古学研究 42-4』 考古学研究会1996

白石浩之「縄文時代草創期研究の現状とその課題」『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る』神奈川県考古学会1996

鈴木忠司「上野Ⅱ文化層の位置付けをめぐって」『大和のあけぼのⅡ』大和市文化財調査報告書32 大和市教育委員会 1988

鈴木次郎『相模野第149遺跡』大和市文化財調查報告書34 大和市教育委員会1989

戸田哲也・相原俊夫『大和市月見野上野遺跡第2地点』玉川文化財研究所1984

戸田哲也「隆起線文土器編年試案」『「藤沢の縄文時代草創期を考える会」発表要旨 』湘南考古学会1993

内藤和美·相田 薫『月見野遺跡群上野遺跡第1地点第4次調査』大和市文化財調査報告書35 大和市教育委員会1989

村澤正弘「いわゆる隆線文土器以前の様相-県央-」『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る』神奈川県考古学会1996 山内清男「縄文式土器・総論」『日本原始美術 1』講談社1964

境川下流域を中心とした縄紋時代草創期隆線紋土器の編年

小 林 謙 一

境川下流域に当たる藤沢市では、近年草創期隆線紋期の良好な土器資料が多数発見されてきている。これらは、出土状況も明瞭で地点ごとの遺物内容や、遺構が伴う事例を含むことから、当該期の様相を知る上で、極めて重要な資料である。また地点ごとに比較的短期的な利用が想定され、時期的に単期的な土器群が遺存していると考えられることから、編年研究の上で、良好な基準となり得る。ただし、層位的にはこれらの間の時間的関係が導き出される程の層位差がみられない(黒色化などは微環境の差異が大きく影響しているものと思われる)ため、相互の序列は、型式学的な検討によっている。

筆者は、慶應義塾湘南藤沢キャンパス(SFCと略)、南鍛冶山遺跡の出土土器に触れたことを契機として、当該地域の編年を検討してきた。今回の機会に、藤沢市内の土器の時間的位置づけを整理するとともに、他地域の類例、坂本彰氏が提示された花見山遺跡出土土器との関係、最後に隆線紋土器の型式圏・地域性などの今後の研究課題にも簡単に触れておきたい。

編年基準については、小林達雄、大塚達朗、鈴木正博他各氏の議論を参照しつつ検討しているが、 現状での私見である。資料の出典・参考文献ともに、紙数の関係から詳細は割愛させて頂く。

1. 境川下流域の編年と花見山遺跡及び他地域との対比

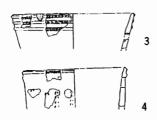
- I 期 やや太い隆線。花見山1式にほぼ相当する。器面の八の字爪形文併用は、花見山ではNo.26例のみ、境川下流域では多数存在する。横位短隆線は、南原、南鍛冶山、多摩ニュNo.426や南九州にも存在。
 - Ⅰ a 期(古) 全周隆線単条、隆線上刻。SFCⅡ区住居状遺構、ナスナ近隣2、藤沢252。
 - I a 期(新) 全周隆線単条・複条、隆線上刻。南鍛冶山遺跡、上野第2-A~C·F。=花見山1(No.2~6)・2式(No.17~28)の一部。これらは第1条目が口唇より下位、口唇上加飾なし、などが特徴。 上黒岩1期(表採)、南原、広福寺、沼津葛原沢4配石。
 - I b期 隆線上刻(一部弱く加飾化)、隆線単条・複条。SFCV区(5-7区含む)、黒川東。=花見山1式の代表例(No.1)及び花見山2式一部(11~13·40)。
- Ⅱ期 幅4~5mm程度の隆線。隆線上・口唇上波状加飾の一般化。
 - II 期 a (古) 隆線1~2条で波状加飾、口唇につく。 II 期の最古段階=花見山2式の大部分(14、15、29、36、42~47)。花見山で多量に出土する爪形のみの48~52及び口唇上のみ(=SFC1-2区(Ⅲ区D))
 の位置づけは I a新~ II a期のいづれか? 斜格子沈線も同様。
 - Ⅱ期a(新) 文様帯の区画明瞭化・多帯化。柄沢(藤沢市28集写真63)、上野第1地点?。=花見山2式の一部(41・37~39)。41は文様モチーフが大波状、37~39は多条による文様帯。
 - Ⅱ期b 隆線上波状加飾、隆線多条化。波状加飾2種有。SFCI区。代官山、柄沢の多条の資料。 月出松、なすなNo.2、駒沢学園、三宮宮前、向原B。=花見山3式の一部(No.116)。

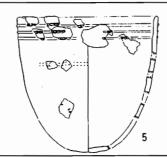
I a (古)期





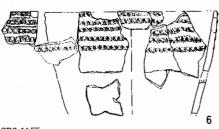
SFC II区

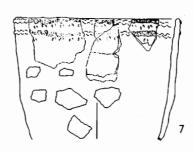




I a (新) 期

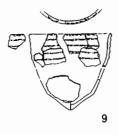
南鍛冶山

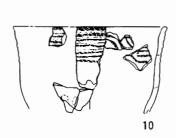


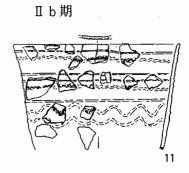


I b期

SFC V区







SFC I区



Ⅲ期

SFC II区 (3-6区)

第1図 境川下流域の隆線文土器

Ⅲ期 微隆線的・多条化。SFCⅢ区(3-6区)。栗木、多摩ニュNo.116。=花見山3式の大部分(96~115、117~)、多条化の様相等により、細分の可能性もあろう。

2. 花見山式の評価と境川下流域との対比

- 1)坂本の花見山式の型式設定は南関東地方の草創期隆線紋段階の土器型式として認識したい。現状では、その明瞭な定義、さらには分布・系統等の属性、地域的差異や他の型式土器群との対比の検討が未了である。型式内容については今後の検討が重要であろう。
- 2)坂本の編年案については、個別の資料については異なった位置づけを想定するものの、花見山1 ~3式の時間的組列は妥当と考える。概ね小林の境川下流域の編年 I ~Ⅲ期が対応可能である。
- 3)小林はSFCII・V区・南鍛冶山の土器群を境川下流域の隆線紋土器I期、すなわち成立期と考え、これと花見山1式がほぼ対応と考える。相模野149L1S上層・寺尾第一文化層出土土器は、隆線紋土器直前段階に当たるとする村澤・白石らの見解を踏襲する。
- 4) 花見山1式相当のSFСⅡ区・南鍛冶山では、爪形文も器面に併用されている。
- 5)花見山1式は、南鍛冶山・SFCV区に対比、花見山2式はSFC1-2区?、花見山3式古手はSFCI区に類似、花見山3式新手はSFC3-6区に類似と、概ね対応可能であるが、花見山1式新手とSFCV区例は形式内容に変異が大きい。花見山での花見山2式の典型例(小林IIa(古))は境川下流には乏しく、時期的な違いか系統差によるものか検討を要するが、通じて型式的な変遷が追えよう。

3. 課題と展望

- 1)まず地域編年を各地域ごとに作り上げ、後に交差年代により広域編年を検討すべきである。 地域ごとの編年では、可能な限り時期細別・地域区分を仮定し、型式学的な組列を組み立てた上 で、対比・統合を検討する必要がある。系統についても、隆線波状加飾に2種類の指使いがあり、 摘み状の波状加飾の隆線紋に、同様な指使いであるハの字状爪形文が施文され、捻り状の波状加飾 の隆線紋は三帯の文様帯を構成する例が多いなど、少なくとも2系統がある。2者はSFCI区で共 伴する。
- 2)時期的な細分及び系統の区分を検討することは、隆線紋段階の居住期間/遺跡の継続期間・規模 に重要な示唆を与える。花見山遺跡の多量の土器がどの程度分かれるのか/やはり一時期に多量の 土器が残されているのかは、土器の細別研究・遺跡内分布や出土状況から検討していく必要がある。
- 3)細かな属性分析による隆線紋段階の地域性の検討も重要である。境川下流域では工具に人体爪の使用が一般的であるが、花見山例では箆状工具も認められる。また縄原体の痕跡も追求していく必要がある。土器にどの程度の地域性がどのように顕在しているかについては、端的に言えば草創期段階でも、その後の東日本縄紋土器のあり方に近い様相を持つと予察している(型式土器群とその中の地域的タイプ・及び強い相互の関連の存在など)。土器の型式内容からみた日本列島東部縄紋文化の中での位置づけを検討していく必要があろう。

「花見山式土器」の設定について

戸田哲也

1. 花見山式土器とは?

待望の横浜市花見山遺跡の発掘調査報告書が刊行された(坂本ほか1995)。

この報告書中において坂本彰氏は第1群土器すなわち隆(起)線文土器群を「花見山式土器」と呼ぶことを提唱された。その第1群土器の特徴とは、「丸底深鉢を中心とした形態と、横走隆線・ハの字文・斜格子などの文様(装飾)を持っている。」と定義される。どうやら花見山遺跡出土の文様ある土器群の全てを花見山式と考えられているらしい。

しかし本来新型式名を提唱するためには、全国各地多くの遺跡より発見されている隆起線文土器との型式学上の異同を明示し、神奈川県横浜市域に存在している花見山資料の中から、型式学的、編年学的に有用な武器となるべき特徴を摘出される必要がある。例えば、花見山式の特徴として先にあげた内容から横走隆(起)線文を取り上げて考えてみれば、従来認識されている隆起線文土器群にはほぼ普遍的に見られる特徴であって、決して花見山式と改称し得る独自な特徴を持つものではないことは明らかである。別の言い方をすれば、現在まで発見されているほとんど全ての隆起線文土器を花見山式と呼び変えねばならないことともなってしまうのである。

ハの字文(ハの字状爪形文)、斜格子文についても広く東北南部から中部北陸まで類似例が認められ、 それらに対しても花見山式とされているものとの異同を明らかにする必要があろう。

坂本氏は山内清男(1964)の型式設定の定義を引用されているが、「一定の形態と装飾を持つ一群の 土器であって、他の型式とは区別される特徴を持つ(評者傍点)」とされる山内の指摘をそのまま坂本 氏にも向けなければならない。山内の言う他の型式との区分とは、時間的前後関係と、空間的型式差 の両方を含むことは論を俟たない。評者にとって坂本氏の型式提唱の基本的基準が理解できず、その 方法論的手続きにも賛同しかねるのである。

坂本氏は次のようにも言う。「100個体以上が存在する資料は型式設定の要件をそなえている」と。 しかしその要件とは、100個体がまず同時期の内容を示してこそ初めて検討の俎上に上るものであろう。花見山遺跡での出土状態は上層と下層とで接合する資料が認められ、坂本氏自身が、層位の点からは各類の新旧を決定するのは困難な状況であったことを述べられている。

100個体以上の花見山遺跡の土器群は層位的裏付けを持たず、任意の配列により花見山1~3式へと細分される。その場合花見山1式とされるものは、わずか1個体と6片の有文破片とによって設定されているのである。むしろ逆説的な言い方となるが、上層と下層が接合する花見山遺跡のあり方は、素直にそのまま同時期の土器群として理解することはできないであろうか。先の考古学講座(神奈川県考古学会1996.3.3)でも指摘したし、かつて大塚達朗氏の論文(大塚1982)に対しても同様な疑問を呈したことがあったが(戸田1984)、花見山の土器を細分するということは、絶対年代に置き換えた時

に、一体何百年、何千年間の居住の継続(連続)を考えねばならないこととなるのであろうか。

遺跡の継続性は中断期をはさみ、長期に亘ることは決してあり得ないことではないが、それでも坂本氏の花見山1~3式となれば、ほぼ隆起線文土器全期間をカバーすることとなり、1,000年間の時間幅は見なければならない。評者の素朴な疑問は1,000年間の存在期間と、その後の11,000年近くの時間経過の中で、なお土器・石器・礫などの資料がまとまり、かつ接合資料をも含むということは、人為的攪乱の少なさを示すこととなり、花見山遺跡が短時日の居住であったことの証左とも考えることにつながる。

2. 花見山土器群の分類

かつて評者は、大和市月見野上野遺跡第2地点の調査報告書において、武相地域の隆起線文土器群の編年論を述べた(戸田1984)。この時点では土器群の全貌は紹介されていなかったが、花見山遺跡の主体土器群について『縄文土器大成1』(岡本勇編1982)の写真をもとに分析したことがある。その論旨はハの字状爪形文を持つ土器群を仲介として花見山土器群の同時性を検討することにあった。少し長くなるが、分類内容を引用し、分類に該当する今回の報告書土器番号をゴチックで示してみる。

「-前略-横浜市花見山遺跡の資料は、その内容の全てが明らかではないが、公表されている範囲では大きく3類に分けて考えることができると思われる。

仮にA類とするものは、口唇部直下に波状隆起線文を一条ないし二条施し、以下無文とするグループである(11~17、29)。

B類とするものは、「ハ」の字状爪形文あるいは円形刺突文を文様の中に取りこんでいるものであり、波状・平行隆起線文と組み合いやや複雑な文様を構成するグループである。

B類はさらに2種に分けられ、A類のように「ハ」の字状爪形文を加えても2条程度の文様しかもたないものと(36、37、38、39、115)、隆起線文と「ハ」の字状爪形文とを組み合わせた口縁部文様が幅広く胴部までわたって施されるものとがみられる(40、41、42、116、117)。

C類とするものは、平行微隆起線文が多条化して施されるグループである(99~102)。

A~C類の関係を考えると、A類とB類にみられる波状隆起線文が共に指頭によるものと考えられており、手法的・文様的にも共通し、両者の同時性を考える証左となろう。

一方、C類については波状文を用いるA・B類と比べてかなり異なった感を受けるが、草創期初頭段階という背景を考え、これらの土器群が時間差をもっていないと仮定した場合、B類中にみられる平行隆起線の一部にC類の微隆起線と近いものを認めることができる(115~117)。

さらに、B類の中にみられる「ハ」の字状爪形文あるいは円形・D字形・鳥足形などの異種文様と 波状文・平行隆起線文とが組み合わされる幅広の文様構成全体が(41、116、117)多条化微隆起線の文様 帯幅と関連すると考えることもできる。

このように考えると、B類を介在してA~C類の三者が関連することとなり、同時期の文様系統上の差異を示しているあり方として捉えることが可能となる。-後略-」

評者は花見山資料を理解して行く上での型式学的抽象化として上記の3分類を行った。A類(交互押捺を含む小波状隆起線文)、B類(ハの字文及びその変形)、C類(平行微隆起線文)のA~C分類は、今回の坂本分類に従えば、A類とB類の大部分が花見山2式、C類とB類の一部が花見山3式となり、新旧の関係に時間的に分離されてしまったこととなる。

3. 花見山式土器の細分について

さて坂本氏は型式提唱としての花見山式を3細分され、1式(古)、2式(中)、3式(新)と設定されたが、そもそも花見山式の輪郭が不明なままに、段階区分とも思われる型式細分を行われた。花見山1式はわずか1個体の完形土器と隆起線上の刻目手法が異なる4片の口縁部小破片とによって設定されるが、この型式設定はその手続きにおいて、縄文土器の型式提唱として受け止めるわけにはいかないであろう。層位学的証明はもとより、先に自身で述べられた100個体以上による要件はどのようになってしまったのであろうか。この花見山1式とされる土器は、他の花見山の土器に比べて刺突(刻目)技法をもつ短隆線の存在から、型式学的に古い要素かもしれないという意味しか受け取れないのである。しかしその短隆線的文様構成は、115の土器に類似を認めることができ、あるいは波状隆起線の下にハの字状爪形文を重層化する36・37などの文様帯意識と通ずる点を見ることもできよう。花見山出土土器群の中から花見山1式を分類することには反対せざるを得ない。

次に花見山2~3式に分離される論拠は、降起線の差異に基づき、新しくなるほどに隆起線は多条化 し、技法は簡略化される点を取り上げられた。この思考の背景には、小林達雄氏がすでに1962年に指摘 された微隆起線文への時間的移行という概念に影響されているものと考えられるが(小林1962)、小波状 文が1~2条施される花見山2a類から、平行多条微隆起線文の3a類へ変化したという型式学的証明 が必要とされる。別の言い方をすれば多条化(押し引き)手法をもつ3a類の直線文様が、2a類から出 現し得るのかという疑問なのである。この両者にはどう見ても差異が大きく、進化論的にはその中間型 をもって示さなければ、この変化を連続する時間差とする証明にはならないであろう。 2 a 類を古とし、 3a類を新とすることは、微隆起線文が新しいという先入観を前提として配列されたとしか考えようが ないのである。前述の引用のようにかつて評者も花見山の土器群を分析するとき戸田A類-波状隆起線 (坂本2 a類)と戸田C類-平行微隆起線(坂本3 a類)の差異が大きい点について困惑したが、戸田A類 (坂本2a類)をナスナ原例に続く波状文様の流れと見て、戸田B類-ハの字状爪形文(坂本2b類、2c 類)を東北南部との関連による異系統性を推定し、B類とC類に通ずる幅広の文様帯構成との関連を推 定することにより在地型の波状文様と平行微隆起線文、そしてハの字状爪形文の三者が同時期存在とな るという現象を推定した。今回の報告書により明らかにされた115の爪形文と押し引き並行微隆起線文 の重層例の存在も上記の推定を示す例と見ることができる。従って以上の評者の見解は未だ変更するつ もりはなく、層位学的、あるいは他の単純遺跡資料での様相の検討まで主張しておきたい。

4. おわりに

なお、単純資料の捉え方に関連して月見野上野第2地点出土土器群は、いわゆる細隆起線文段階として評者は花見山以前に位置づけたが、坂本報文では多摩No.426と共に花見山2式に比定される。評者には明らかに異なる土器群と思われ、「比定」という言質には釈然としないものがある。どのように同じであり、どのように異なるかを説明される必要があろう。最も、こと月見野上野第2地点に限らず、花見山1~3式に「比定」された武相の各遺跡についても同様の質問を発せねばならないであろう。

最後に隆起線文土器の編年的呼称にあたっては、絶対的な層位データが欠如する中で、従来の隆帯 文→細隆起線文→微隆起線文の表現を使わざるを得ないところがある。そのあいまいさに対してひと たび花見山1~3式という呼称が現れると、概念的な利便さにより無意識のうちに一般化してしまう 危険性がある。層位学的証明、あるいは同一フンドの確認という地道な手順を経て、型式学的分類と 在地形、非在地形という地域系統観を持って花見山第1群土器群の研究は続けられなければならない。 その間、細隆起線文土器、微隆起線文土器の用語はなお必要とされていくと評者は考える。

長年意見を交わしてきた坂本彰先輩には厳しい批判を向けてしまい、言質に失礼があればお詫び申 し上げたいと思う。花見山式土器と真に呼称すべきものはあの土器群中に必ず存在していると評者は 考えている。是非その正確な輪郭を坂本氏の手によって再提起していただきたいと願いながらコメン トを終えたい。

引用文献

坂本彰ほか『花見山遺跡』横浜ふるさと財団1995

山内清男「縄文式土器・総論」『日本原始美術1』1964

神奈川県考古学会『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る』1996

大塚達朗「隆起線文土器瞥見」『東京大学文学部考古学研究室紀要第1号』1982

戸田哲也「縄文時代草創期の遺物群について」『月見野上野遺跡第2地点発掘調査報告書』1984

岡本勇編『縄文土器大成1』講談社1982

小林達雄「無土器文化から縄文文化の確立まで」『上代文化 別冊』1962

長堀北遺跡縄文時代草創期遺物群の層位的出土例

小池 聡

1. はじめに

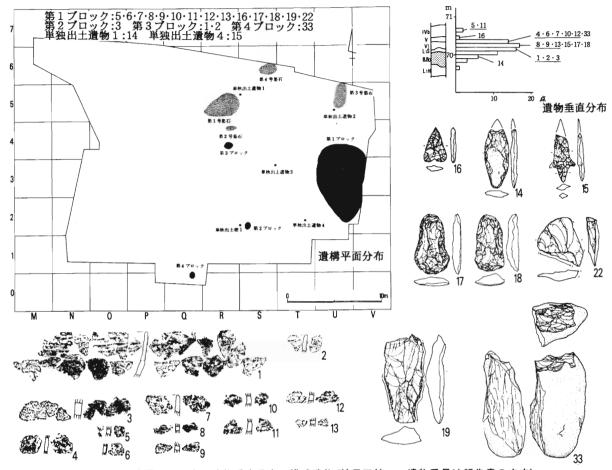
大和市長堀北遺跡では富士黒色土層 (FB)から関東ローム層中 (B.B1 ~ L2)までに、縄文時代草創期から旧石器時代の文化層が6枚重層して検出された。このうち、上位にある縄文時代草創期遺物群は富士黒色土層から立川ローム層の最上部 (L1S・B.B0) に包含していた。現地での発掘調査・遺物整理作業において、これらの遺物群は、隆起線文土器・無文土器を主体とし石鏃・有舌尖頭器・打製石斧・礫器などを組成する文化層 (第 I 文化層)と、削片系細石刃石器を主体とする細石刃石器群・槍先形尖頭器・打製石斧・削器・楔形石器と有舌尖頭器などを組成する文化層 (第 I 文化層)として分離され、第 I・II 文化層の両文化層は旧石器時代終末から縄文時代草創期の2段階の時間差を持つ文化層が近接して重層していると判断 (小池 1990・1991)された。ここでは、第 I・II 文化層を構成する遺物群の垂直分布を中心として、両文化層遺物群の出土層位を再考し、長堀北遺跡における縄文時代草創期遺物群の層位的出土例について触れてみたい。

2. 第Ⅰ・Ⅱ文化層遺物群の出土例(第1・2図)

遺物整理作業時に第 I・II 文化層の分離根拠の一部とした両文化層遺物群の垂直分布図を作成してみた。報告書の層序解説で使用した基本層序図は使用せず (基本層序図は調査地点の最も西側部分Q - 1 グリッドの層序であり、本遺跡は東に向かって緩やかに傾斜しているため)、第 I・II 文化層遺構群が最も集中する調査範囲中央部 3 ラインのN - 3 グリッド土層堆積を使い縦軸に 10cm ピッチで標高を、横軸に遺物点数を表した。以下、この遺物垂直分布図と遺構平面分布・構成遺物図から本遺跡縄文時代草創期遺物群の出土層位例を述べよう。

第 I 文化層の遺構はブロック 4 基、集石遺構 4 基、単独出土遺物 4 点、単独出土礫 2 点である。平面分布は調査範囲の中央部から東側に集中して検出された。遺物群の出土層位は富士黒色土層中位 (第 IV b 層) から B B 0 上面までで、遺物群の垂直分布は富士黒色土層下部のローム漸移層 (第 VI 層) に遺物の最も集中するピークがみられる。ただし、隆起線文土器 (1・2)と無文土器 (3)は遺物の最も集中するレベルより少し低く、ローム漸移層 (第 VI 層)の下底から L 1 S 上面で出土した。相模野台地で検出される隆起線文土器は通常、富士黒色土層の中位から下部で出土するものが多く、本遺跡の様にローム漸移層下底または L 1 S 上面で出土することはない。

構成する遺物群は、隆起線文土器 (1・2)・無文土器 (3~13)・局部磨製石鏃 (16)・槍先形尖頭器 (14)・有舌尖頭器 (15)・打製石斧 (17·18)・礫器 (33)・使用痕を有する剥片 (19・22)・剥片・砕片など 74点である。1・2の隆起線文土器は小型深鉢形で、口縁部に幅広で低い隆起線を4条巡らせており、隆起線文土器の中でも比較的古いとされるもので、層位的にも最も下の富士黒色土層下部か

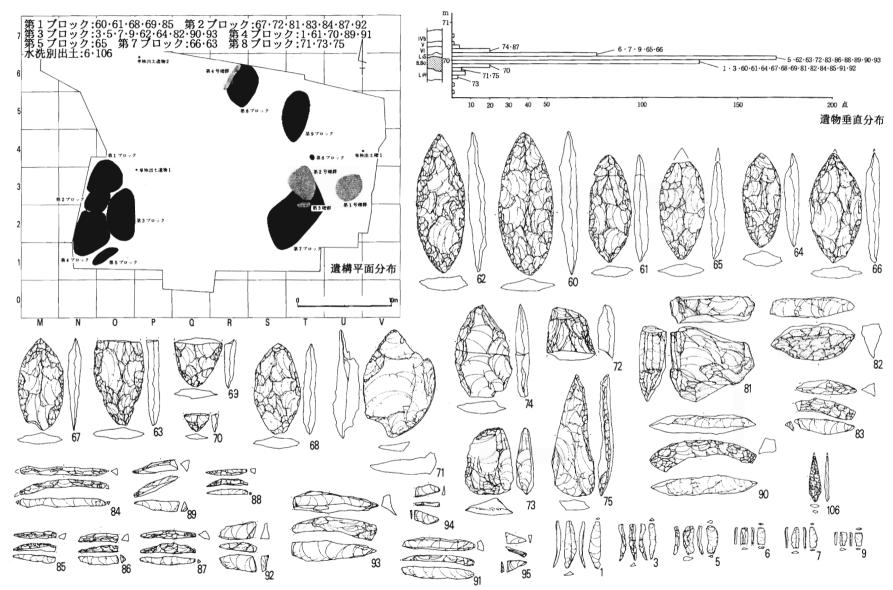


第1図 第1文化層遺構平面分布・遺物垂直分布・構成遺物(縮尺不統一・遺物番号は報告書のまま)

らL1S上面で出土した。胎土には獣毛を含み、砂粒を多く含んでいる。3の無文土器は前述の隆起線文土器と同一レベルで出土したもので胎土に獣毛を含んでおり、隆起線文土器より古いのではとの指摘もあるが、調査時の出土状況から隆起線文土器と同一時期と考えている。

第Ⅱ文化層の遺構はブロック 9 基、礫群 4 基、単独出土遺物 2 点、単独出土礫 1 点で、調査範囲のほぼ全域から検出された。第Ⅰ文化層遺構との重複関係は、第8ブロックの一部が第Ⅰ文化層第4号集石と重複し、第1号礫群が第Ⅰ文化層第1ブロックに完全に内包されるように重複関係にある。遺物群の出土層位は富士黒色土層下部 (第V層)からB.B 0 中位までで、垂直分布はL1S中位にピークがみられる。第Ⅰ文化層遺物群ピークは富士黒色土層最下部にみられ、両文化層のピーク差は約10~20cmである。

構成する遺物群は、有舌尖頭器 (106)・大型・中型の槍先形尖頭器 (60 ~ 70)・槍先形尖頭器未製品 (71・74)・打製石斧 (72)・楔形石器 (73)・削器 (75)・細石刃 (1・3・5~7・9)・細石刃核 (81)・細石刃核原形 (82)・削片 (83~95)・剥片・砕片など 884 点である。削片と細石刃核原形、削片同志、削片と細石刃核原形作出時の調整剥片、打製石斧と調整剥片など豊富な接合資料を含んでいる。また、石材の傾向として細石刃石器は安山岩を多用し、槍先形尖頭器や打製石斧は凝灰岩やホォルンフェルスを用いている。



第2図 第11文化層遺構平面分布・遺物垂直分布・構成遺物(縮尺不統一・遺物番号は106を除き報告書のまま)

22

このうち、有舌尖頭器や剥片・細石刃・削片の一部など 429 点の石器が第 1 ~ 5 ブロックの廃土から出土している。特に 106 の有舌尖頭器はチャート製単独個体であるが調査時の状況から考えて本文化層石器群に共伴組成し、最も古いとされる相模野 No.149 遺跡 L 1 S 上部文化層 (鈴木 1989) の有舌尖頭器に、細身で基部に弱い逆刺を持つなど形態的に非常に良く類似している。このことは、現時点では有舌尖頭器の初源が長堀北遺跡第 II 文化層の層位から、L 1 S 中位あたりの時期にあると推定できるであろう。

3. まとめ

長堀北遺跡第Ⅰ・Ⅱ文化層の層位的出土例について、両文化層層位の検討を行い、第Ⅰ文化層が富士黒色土層下面に集中し、第Ⅱ文化層がL1S中位に集中していることが改めて理解された。

注目されるのが、第 I 文化層の有舌尖頭器を含めた槍先形尖頭器群と削片系細石刃石器群の共伴関係であり、このうち槍先形尖頭器群は神子柴系石器群に対比でき、削片系細石刃石器群は湧別技法の系統に対比され、大型細石刃核は在地系技術に含まれる (栗島 1993・砂田 1994)と考えらる。削片系細石刃石器群は在地石材であるガラス質黒色安山岩を多用し石材面で在地化し、荒屋型彫器が組成から欠落して在地系細石刃石器群に取り込まれ、神子柴系槍先形尖頭器や後出の有舌尖頭器を組成していると考えられる。相模野台地で長堀北遺跡第 I 文化層とほぼ同時期と考えられる上野遺跡第 1 地点第 I 文化層 (相田・小池 1986)や勝坂遺跡 A 地点 (内川・高橋 1993)の遺物群は細石刃石器群と槍先尖頭器に無文土器を組成する。これらの遺跡の細石刃石器群は白石氏 (白石 1993)、栗島氏や砂田氏により型式学的に長堀北遺跡第 I 文化層 - 上野遺跡第 1 地点第 I 文化層・勝坂遺跡の時間差が与えられている。このことは、今回再検討した層位的にも、上野遺跡第 I 文化層・勝坂遺跡は長堀北遺跡第 I 文化層より高いし1 S 上部に集中して長堀北遺跡第 I 文化層に後続し、富士黒色土層下部~L 1 S 上面長堀北遺跡第 I 文化層に先行する段階であると考えてよいであろう。

文末ですが、日頃から多くの御教示を頂いている村澤正弘氏、図版作成にご協力頂いた細井佳浩氏 に記して感謝いたします。

引用・参考文献

相田 薫・小池 聡『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書第21集 大和市教育委員会1986

内川隆志・高橋真実『勝坂遺跡第45次調査 - 相模原市市道磯部上出口改良事業に伴う埋蔵文化財調査 - 』 相模原市市道 磯部上出口改良事業地内遺跡調査団1993

神奈川県考古学会編『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る』1996

栗島義明「湧別技法の波及一削片系と在地系の細石刃核一」『土曜考古』第17号 土曜考古学研究会1993

小池 聡『長堀北遺跡一資料編一・一本文編一』 大和市文化財調査報告書第39集 大和市教育委員会1990/1991

白石浩之「細石刃石器群と神子柴型・長者久保型石器群の関連性について」『細石刃文化研究の新たなる展開』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ1993

鈴木次郎『相模野第149遺跡-相模考古学研究会による発掘調査の記録-』大和市文化財調査報告書第34集 大和市教育委員会1989

砂田佳弘「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』第30号 神奈川考古同人会1994

相模野台地の細石刃文化の終末

鈴木次郎

1. 相模野台地の細石刃石器群の変遷

相模野台地の細石刃石器群は、層位的には、L1H層上位に初現がみられ、続くB0層でもっとも隆盛し、さらに上層のL1S層まで検出されている。このうちL1S層上位では土器を共伴する例もみられ、細石刃文化は先土器時代終末から縄文時代初頭まで展開したことが明らにされている。

相模野台地の細石刃石器群の変遷を出土層位にもとづいて概観すると、細石刃剥離技術(細石刃石核)は、L1H層上位の代官山田や吉岡B区では代官山型がみられ、B0層からL1S層下位(中位)までは野岳・休場型が継続し、その後半には幌加型に類似する船野型が加わる。そして、終末のL1S層上位では削片系に推移する。同様に、細石刃及び細石刃石核の石材、黒曜石の産地、器種組成等も層位的に変化・

推移している(表1)。

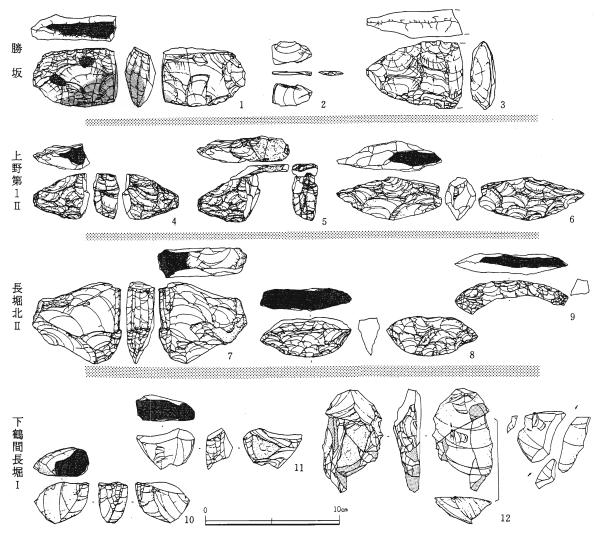
この中で、縄文時代初頭に位置付けられるL1S層上位の長堀北耳・上野第1地点耳・勝坂の3石器群は、削片系の細石刃石核をもち、器種組成に中・大形の槍先形尖頭器や石斧を安定して伴う等、旧来の番石刃石器群とは内容を大きく異にする。

_		Z Z	<u>'</u>	11	73	:=5	<u> </u>	4E.V	7 M	47_	ניכו	<u> </u>	80 4	+•	ノヤ	7 124													
		細	石	刃	核	細石刃(核)の石材							黒	曜	石	の	産	圳	b			器		重 組			成		
層(花	(位 (官山	野岳休場型	1	削片系	黒曜石	チャート	凝灰岩	頁岩	流紋岩	色安	和田	ታ	麦草		冶	畑	峠	津	器		錐器	形石	用	斧			頭	
L 1 S	勝 坂 上野 Ⅱ 長堀北 Ⅱ				000	Δ		0 0 0	0		00										0			0	? 0		0		•
上中	城山I		0			Δ		0											Δ	0				0		?	0		
L	1 S下位		0	0		0	0	0	0	Δ									0	0	Δ		Δ	0		0	0		
В	0 上位		0			0	0	Δ	Δ										0	0		0	Δ	0		0	0	Δ	
В	0 中位		0	Δ		0	0	Δ	Δ				0				Δ		0	0	Δ	Δ		0		Δ		Δ	
В	0 下位		0			0	Δ		Δ	Δ		0		0				Δ		0	Δ	Δ	Δ	0		0	Δ	Δ	
L	1 H上位	0				0						Δ			0	0		0		Δ	Δ			0			Δ	Δ	

2. 相模野台地の削片系細石刃石核の特徴(第1図)

長堀北遺跡第川文化層 ガラス質黒色安山岩を石材とする細石刃石核(7)・細石刃石核原形(8)各 1点と稜付削片・スキー状削片(9)が出土している。細石刃石核原形は、断面凸レンズ状の幅広の両面加工の石器(槍先形尖頭器)を素材とし、スキー状削片と接合する。この接合資料や稜付削片とスキー状削片との接合資料から湧別技法の存在が確認される。一方、細石刃石核は、分厚い剥片を素材とし、湧別技法は認められない。素材の末端部を主剥離面からの打撃により折断して打面を作出し、反対端を両面加工により楔形に整形し、細石刃剥離に先立って正面から削片を剥離して打面の角度を調整している。

上野遺跡第1地点第 || 文化層 玄武岩 (黒色頁岩及びホルンフェルスの可能性あり)を石材とする細石刃石核(4)・細石刃石核原形(6)各1点と稜付削片を含む削片2点が出土している。スキー状削片はなく湧別技法は確認されない。細石刃石核と削片との接合資料(5)から、素材は断面D字状の幅



第1図 相模野台地の削片系細石刃石核とその関連資料(網部は削片剥離による打面)

広の両面加工石器で、側面に素材の節理面をそのまま残して打面とし、細石刃剥離を行った痕跡を残す。その後、正面からの打撃により削片を剥離して打面再生し、細石刃剥離を進めている。細石刃石核原形は、やはり分厚い断面D字状の両面加工石器(槍先形尖頭器)を素材とし、長軸方向の一端から稜付削片を剥離して打面を作出したもので、打面からの側面調整が部分的にみられる。

勝坂遺跡 凝灰岩を石材とする細石刃石核(1)・削片(2)と細石刃石核の素材の可能性がある両面加工石器(槍先形尖頭器)の折断品(3)が各1点出土している。細石刃石核は、打面D字状の両面加工石器の一側縁に長軸方向の剥離を行って打面を作出したもので、打面からの側面調整がみられる。削片は、細石刃石核原形の正面から長軸方向に剥離したもので、背面の剥離方向は主剥離面と直交し、スキー状削片とは異なる。

3. 北方系細石刃石器群の広がりと相模野台地の削片系細石刃石器群の位置付け

北方系の細石刃石器群としては、硬質(珪質)頁岩を主要石材とし、荒屋型彫器・角二山型等の掻器 ・削器を特徴的に伴う石器群がある。細石刃石核は、札滑型等湧別技法を特徴的にもつが、一部に幌 加型もみられる。これらの石器群は、本州では東北地方から中部・関東、さらに中国山地まで広範な広がりを示し、関東では、後野B(茨城県)、頭無(群馬県)、木戸場A・木戸先(千葉)、白草(埼玉)など古利根川及び荒川以北(以東)に分布する。そして、神子柴・長者久保系石器群や土器との共伴関係がないことや、後野遺跡での層位的上下関係等から相模野台地の削片系細石刃石器群よりも明らかに先行するものと考えられる。

これに対して、相模野台地の削片系細石刃石器群は、石材が硬質頁岩を用いず在地系石材を用い、器種組成に荒屋型彫器等を伴わず、中・大形の槍先形尖頭器や石斧を伴う等前記の北方系細石刃石器群とは内容が大きく異なる。また、細石刃剥離技術では、長堀北Iでは湧別技法を示す資料もあるが、同じ長堀北Iの細石刃石核や上野II・勝坂ではスキー状削片を剥離しておらず、湧別技法は認められない。これらの細石刃石核に共通することは、細石刃剥離作業面となる位置から長軸方向の削片を剥離して打面を作出していることであり、上野IIの接合例にいたっては、はじめは素材の節理面を打面として細石刃剥離を行っていた可能性があり、打面再生の段階ではじめて削片剥離を行ったとも思われる。このような細石刃石核は、前記の北方系細石刃石器群が相模野に波及する過程で変化したものなのであろうか。長堀北IIにみられる湧別技法はもちろん北方系の技法であり、また断面D字状とはいえ両面加工の石器を素材とすることも北方系との関連でみることができる。しかし、相模野の削片系細石刃石核に類似する細石刃石核は、東京都狭山Bや長野県柳又A等、前記の北方系細石刃石器群がそのまま波及しなかった地域にこそ多くみられ、北関東や東関東には認められない。相模野台地の削片系細石刃石器群の成立は、やはり北方系の影響とともに在地の細石刃石器群の流れの中で検討を加える必要がある。

相模野台地では、削片系細石刃石器群の直前に位置付けられる細石刃石器群は、LISを出土層位とする上和田城山 I や下鶴間長堀 I などである。上和田城山 I (LIS中位)は、分厚い剥片や大形剥片を分割したものを細石刃石核の素材とし、直方体状の石核原形の一面を打面として細石刃剥離を行っている。打面の調整・再生・転位が頻繁にみられる等野岳・休場型細石刃石核の特徴をもつ。黒曜石が非常に少なく凝灰岩を主要石材とし、石核が大形化する等その終末段階の特徴を示すが、ほかに、断面三角の縦長剥片の主剥離面を打面として末端部から細石刃を剥離する船底状の細石刃石核も存在する。また、下鶴間長堀 I (LIS下位)は、剥片の主剥離面や剥片を分割した面を打面とし、打面からの側面調整やさらに下底部からの調整を行って舟底形の石核原形を作出し、その一端又は両端から細石刃剥離を行う船野型細石刃石核を主体とする。しかし、その中には、細石刃剥離に先立って正面(細石刃剥離作業面)から長軸方向の剥離を行って打面を作出するものが数例みられる(第1図10・11)。この長軸方向の剥離は、打面再生の可能性がまったくないわけではないが、接合資料(同12)からは新規の打面作出の削片と考えられ、長堀北耳の細石刃石核にみられる打面作出と共通する。このように、下鶴間長堀 I の船野型細石刃石核の一群の中に削片系の細石刃石核が生れる下地があったのであり、こうした中に、北関東や東関東よりも一足遅れて北方系の細石刃剥離技術を受入れたもので、その結果、相模野台地の削片系細石刃石器群が成立したものと考えられる。

長者久保・神子柴文化と相模野的神子柴文化

織笠昭

長者久保・神子柴文化とは先土器時代終末の日本列島、特にその東北部を中心に展開した文化であり、大陸との関連を持つものとして注目されてきた(山内・佐藤1962・1967、岡本1979等)。現在はこの文化に土器の伴なうことが知られており、縄文時代の起源を探るうえでも重要視されている。近年、相模野台地では、この問題にかかわる層位的出土例が増加し、相模野における縄文時代の幕開けについての地域的特質を解明すべき段階に至っている。

1. 長者久保と神子柴

長者久保・神子柴文化の指標的な遺跡である青森県長者久保遺跡(山内・佐藤1967)からは、大〜小形の木葉形尖頭器、丸鑿形を含む打製・磨製石斧、彫器、掻器、彫-掻器、削器、錐器という石器組成が知られている。尖頭器や剥片石器類の石材は硬質頁岩と黒曜石を主とする。これと同種の遺跡である青森県大平山元 I 遺跡では無文の土器が伴なう(岩本・三宅1979)。

一方、いまひとつの指標的存在である長野県神子柴遺跡(藤沢・林1961)は、きわめて特徴的な分布を示すが、石器文化のあり方としてはまとまりあるものとしてみることができる。ここでも、大~小形の木葉形尖頭器、丸鑿形を含む打製・磨製石斧、掻器、削器は顕著だが、長者久保遺跡に特徴的な彫器、彫-掻器、錐器は見られない。これに磨製石斧製作用と思われる砥石が伴なっている。尖頭器や剥片石器類の石材は頁岩と黒曜石である。

両遺跡共に、石斧、尖頭器以外の剥片石器は主に石刃を素材とする。ただし、神子柴遺跡の石核は 円盤形を呈する。細石器文化にも散見されるもので(織笠1979)、長者久保例とは技法的にやや異なる ものかもしれない。

さて、長者久保・神子柴両遺跡の組成を見ると、神子柴遺跡における彫器、彫-掻器、錐器の欠落が目につく。この違いは長者久保遺跡の報告時点から時期差として考慮されている。ところで、各地で長者久保に対比される石器群を見ると、彫器や彫-掻器を伴なう事例は、北海道から東北を経て茨城県後野遺跡A地区(後野遺跡調査団編1976)周辺をほぼその南限とする。中・南信から南関東以西ではむしろ彫器、彫-掻器、錐器は無いことが通例である。稀に彫器や錐器の報告はあるが、東北日本一般のように明確な形態をなすものではない。

長者久保・神子柴文化については、その編年的研究もすすめられているが(岡本1979等)、一方では 以上に見てきたように、その中での地域差も十分に考慮されなければならない。

2. 相模野台地と神子柴文化

では、南関東の中でも長者久保・神子柴文化と関連する遺跡が層位的に出土するといわれる相模野

台地ではどのような様子だろうか。

石斧と木葉形尖頭器を伴なう石器群は、綾瀬市寺尾遺跡第 I 文化層 (白石1980)をはじめとするLIS 層中~上部を中心に出土し、L1H~L1S層上位までの細石器文化に後続する。相模野段階XIとされる所以である(諏訪間1988)。L1S上部では土器の伴出することがある。石斧・木葉形尖頭器以外の剥片石器を見るとやはり彫器・彫一掻器は皆無であり、稀に錐器が伴なう程度である。長者久保というよりは神子柴に近い組成である。むしろ、大形の礫器や多様な形態のサイド・スクレイパーが顕著であり、これが相模野台地を特徴付けているといってもよい。そしてそこに石刃技法の明確な存在を見ることはできない。

さらに注目すべきは、大和市長堀北遺跡第Ⅱ文化層(小池1991)と月見野遺跡群上野遺跡第1地点第 Ⅱ文化層(相田・小池1986)、相模原市勝坂遺跡(青木・内川・高橋編1993)において、細石刃・細石核の共伴していることである。そしてこれらに先行する細石器文化各遺跡に彫器の伴う例はなく、錐器も稀である。すなわち、剥片石器の組成は神子柴遺跡に共通すると共に、先行時期の主体をなす細石器文化とも共通するのである。

神子柴遺跡の存在する中部地方南部の細石器文化ではどうだろうか。ここでもまた彫器・彫-掻器は皆無に等しく、錐器もまた顕著ではない。そしてこのことは、西北九州の一部や日本海沿岸寄りの地帯を別とする西南日本細石器文化に共通する特徴でもある。

石材の面から相模野を見直してみよう。細石器文化後葉(筆者の第4・5段階 織笠1994)に相当する諸遺跡では黒曜石が激減し、凝灰岩と安山岩をその量的主体とする(柴田1996)。この傾向は、神子柴文化に対比される諸遺跡でも同様である。そして神子柴遺跡の尖頭器と剥片石器類は頁岩類と黒曜石を主体とする点で相模野との相違をみることができる。

このように見てくると、L1S中・上部を中心に出土し神子柴文化に対比される諸例は、さまざまな点で先行時期に共通する要素をひきつぎ、そこに木葉形尖頭器と石斧が加わったと理解することができる。そしてこの傾向は南関東、特にその西部においてよりはっきりととらえられる。

南関東の神子柴文化に対比される諸遺跡の剥片石器組成は、これに先行する中部南半から南関東にかけての細石器文化の上に累積したような組成であった。そして南関東では、細石器文化から神子柴文化へ急激に変化したのではなく、むしろ緩やかな変化、すなわち細石器(相模野LIH上部から)→細石器・大形木葉形尖頭器(相模野LIS中部から)→細石器・大形木葉形尖頭器・石斧・土器(相模野LIS上部から)という変遷のあったことが知られるのである。そしてそこから細石器が消失し、有舌尖頭器が加わり、石鏃が登場することになる。

3. 相模野的神子柴文化の形成

では、神子柴文化に対比されるLIS中・上部の石器群を特徴付ける大形木葉形尖頭器や石斧は、突然登場したものなのだろうか。全体的に漸移的な変化とはいえ、石斧はまさしくそうに違いない。ただし、明確な出土層位例としてはLIS上部からである。LIS中部から出現する大形木葉形尖頭器はどう

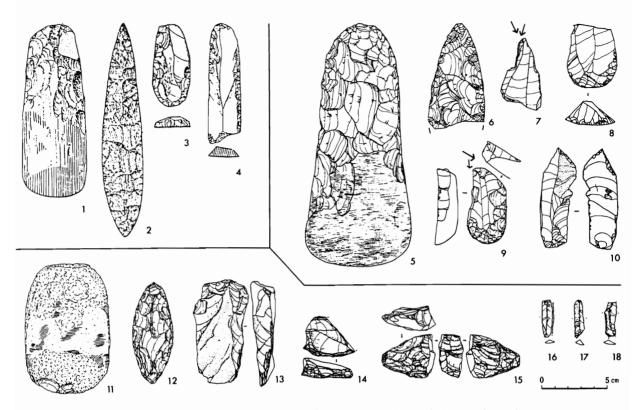
か。先に石材の差を指摘したが、他にも神子柴遺跡との決定的な差がある。それは、大形木葉形尖頭器が神子柴遺跡に比べ形態的斉一性に欠けるという点である。石器研究に妥当な表現ではないが、あえていえば神子柴遺跡に比べ作りが精巧ではないのが南関東、あるいは相模野の特徴である。考古学的にいえば、個体ごとの外形の多様性があり、剥離面個々の大きさが均一ではないのである。そして大形とは言うものの、長さ10cmを越えるものは必ずしも多いわけではない。岡本東三氏の区分によれば中形(5~10cm)が多いことになる(岡本1979)。おそらく、その素材に石刃が用いられなかったであろうことは、先に述べた剥片石器の組成差とともに相模野、および南関東における地域差としてとらえられるのである。すなわち、神子柴文化そのものに対比するのではなく、時期的に対応する、あるいは神子柴文化が地域的・時期的に変容した姿、言うならば相模野的神子柴文化とすべきものなのである。

むしろ、形態的、石材的に神子柴遺跡に匹敵し、大・中・小形の変化をもつ尖頭器は、座間市栗原中丸遺跡第Ⅲ文化層(BB0層)にみられる(鈴木1984)。また、相模野台地と多摩丘陵に接する位置にある城山町風間遺跡群第Ⅰ文化層(BB0上部)では、まさしく大・中形の尖頭器が多数出土している(麻生1989)。

BB0層は通常細石器文化の遺跡を主とするが、後続する相模野的神子柴文化との関連性を考えるなら、栗原中丸遺跡と風間遺跡群の事例については、異論はあるものの、鈴木次郎氏の指摘(鈴木1996)するように十分に検討に値するものだろう。BB0層の下層、すなわちL1H層は相模野尖頭器文化の第3段階であるが、これに先行する第1・2段階(BB1層)の尖頭器よりも大形の例が少数ではあるが出土することにも注意しなくてはならないだろう(織笠1987)。そしてそれは、白石浩之氏も述べるように(白石1993)、長者久保・神子柴文化の年代や細石器文化との関係に新たな光を与える可能性を秘めている。

次に、これらの木葉形尖頭器と細石器の共伴するLIS上部の例について考えてみよう。ここでの細石核は、おしなべて両面調整体を素材とすることが特徴である。東北日本の長者久保・神子柴文化に両面調整素材細石核がまとまった形で共伴する例はない。この細石核は北方系と称されることがあるが、そうした一例、たとえば月見野遺跡群上野遺跡第1地点第 II 文化層の細石核については、報告者である相田薫・小池聡両氏(相田・小池1986)をはじめとする諸氏の見解(堤1987、鈴木1988、織笠1992b、白石1993)のように、西南日本における西海技法(麻生1965、織笠1991)のひとつのあり方とみることで、逆に新たな形での神子柴文化との関係がとらえられるだろう。

この時期は神子柴文化と密接な関連をもつものの、それ以前の細石器文化における西南日本的様相もまた受けつぎ、さらにその東端としての独自性も形成している。こうした視点から木葉形尖頭器と細石器の共伴を再検討していかねばならないのである。月見野遺跡群上野遺跡第1地点第 I 文化層における特異な磨製石斧も神子柴文化のものと同一ではない。総体としてみれば相模野的神子柴文化というよりも、より独自な形での評価が必要になるかもしれない。土器の問題との整合性をはかることは重要であるが、少なくとも石器の検討からは以上のことを語り得るのである。



第1図 神子柴遺跡の石器(1-4)、大平山元 | 遺跡の石器(5-10)、月見野上野1遺跡の石器(11-18) 1·5·11(磨製石斧) 2·6·12(木葉形尖頭器) 3·8(掻器) 7(彫器) 9(彫-掻器) 10(錐器) 4-14(削器) 15(細石核) 16-18(細石刃)

如何なる考古学的文化もこれを正しく位置付けるための基準的資料との対比検討は必要である。しかし、世界のどの地域においても何らかの独自性を見出すことはできる。相模野においては、長者久保・神子柴文化と一括し対比するのではなく、神子柴文化としての対比が重要であり、同時にその対比のみにとどまらない先行石器文化との比較研究が必要なのである。対比自体に重きをおきすぎ、右往左往する必要はない。広い視点を忘れることなく、しかし足元をしっかり見つめた地域の視点こそが、いま私たちにとって忘れてはならないものと思われる。長者久保・神子柴文化として一括してとらえられる文化も、その地域的多様性をとらえるなかで、列島における土器文化の開始の姿を見ていかねばならないだろう。そして組成の理解を生活像の理解へと深めるためには個別形態の徹底的な分析の積み重ねが必要となる。少なくとも尖頭器に関しては、筆者らが実践してきたような分析を経た上での基準資料作り(大竹・百瀬1987、織笠1992a、近藤・小林1992等)が求められている。今、まさになさねばならないことがこれである。そうした研究経過を欠落させることが将来に禍根を残すことになるのはもはや明白である。これにより、今、相模野的神子柴文化と考えられるあり方が、むしろ考古学的世界における相模野文化の中の神子柴的様相として西南日本域地域文化と捉えられる日は、遠くはない。

引用・参考文献

相田 薫・小池 聡「第 工文化層」『月見野遺跡群上野遺跡 第1地点』大和市教育委員会1986

青木 豊・内川隆志・高橋真実編『勝坂遺跡第45次調査』相模原市教育委員会1993

麻生 優「細石器文化」『日本の考古学 1』河出書房1965

麻生順司「先土器時代」『法政大学多摩校地城山地区風間遺跡群調査報告書』法政大学1989

岩本義雄・三宅徹也『大平山元 Ⅰ 遺跡発掘調査報告書』 青森県立郷土館1979

後野遺跡調査団編『後野遺跡』勝田市(現ひたちなか市)教育委員会1976

大竹憲昭・百瀬長秀「中島B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1』長野県埋蔵文化財センター等1987

岡本東三「神子柴・長者久保文化について」『研究論集 V』奈良国立文化財研究所1979

織笠 昭「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学 47』 駿台史学会1979

織笠 昭「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究 13』大和市役所1987

織笠 昭「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部 54』東海大学文学部1991

織笠 昭「弥三郎第2遺跡縄文時代草創期」『土気南遺跡群 Ⅱ』千葉市文化財調査協会等1992a

織笠 昭「南関東における西海技法の受容と変容」『人間・遺跡・遺物-わが考古学論集2-』発掘者談話会1992b

織笠 昭「日本列島の細石器文化」『中日古人類・史前文化淵源関係国際学術討論会柳州国際シンボジューム発表要旨』別府大学 1994

小池 聡「第Ⅱ文化層」『長堀北遺跡』大和市教育委員会1991

近藤尚義・小林秀行他「下茂内遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1』長野県埋蔵文化財センター等1992

柴田 徹「大和市を中心とした相模野台地における旧石器時代の使用石材について」『大和市史研究 22』大和市役所1996

白石浩之「第I文化層」『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会1980

白石浩之「細石器石器群の終末と神子柴・長者久保系石器群の関連性について」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる 展開』八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会1993

鈴木次郎「第皿文化層」『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター1984

鈴木次郎「先土器時代第皿文化層」『宮ヶ瀬遺跡群 VI』かながわ考古学財団1996

鈴木忠司「上野Ⅱ文化層の位置づけをめぐって」『大和のあけぼの Ⅱ』大和市教育委員会1988

諏訪間 順「相模野台地における石器群の変遷について一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握一」『神奈川 考古 24』神奈川考古学同人会1988

堤 隆「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究 13』大和市役所1987

藤沢宗平・林 茂樹「神子柴遺跡跡一第一次発掘調査概報ー」『古代学 9-3』古代学協会1961

山内清男・佐藤達夫「縄紋土器の古さ」『科学読売 12-13』読売新聞社1962

山内清男・佐藤達夫「下北の無土器文化ー青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告ー」『下北』平凡社1967

かながわにおける有舌尖頭器及び石鏃の出現時期について

諏 訪 間 順

1. はじめに

神奈川県は層位的な出土例が豊富である事から、旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器群の変遷がよく理解できる地域である。ここでは、さきのシンポジウムのコメントとして、細石刃石器群の終末の様相とその後に続く縄文時代草創期の有舌尖頭器や石鏃の出現について若干の検討を行う。

2. 細石刃石器群の終末

関東・中部地方における細石刃石器群については、相模野台地の豊富な出土事例と詳細な検討が繰り返されたことにより、稜柱形(野岳・休場型)ー船底形(船野型)ー楔形(削片系)の大きく3段階の細石刃石器群の変遷が明らかになっている(堤1987)。そして、最も新しい削片系の細石刃核は、①頭無遺跡、白草遺跡や木戸場遺跡のような珪質頁岩製で荒屋型彫器を明確に伴う東北日本的な特徴を持つ石器群と、②中ッ原遺跡5B地点、同1G地点や柳又遺跡のような珪質頁岩以外(主に黒曜石)の石材を用いた荒屋型彫器を明確に伴わない石器群、③月見野遺跡群上野遺跡第1地点、勝坂遺跡45次など尖頭器を主体として、無文や刺突文土器と石斧が共伴する石器群に分類でき、①から③へと変遷していくものと考えられる。そして、②と③の間に旧石器時代と縄文時代の境があるものといえる。ここでは、縄文時代草創期を無文土器段階(隆起線文土器以前)、隆起線文土器段階、爪形文土器段階の3段階に区分し検討する。

3. 無文土器段階の石器群と有舌尖頭器

さて、神奈川県内の③の石器群は、土器の有無、細石刃、尖頭器の三者の在り方から4つにグルーピングできる。

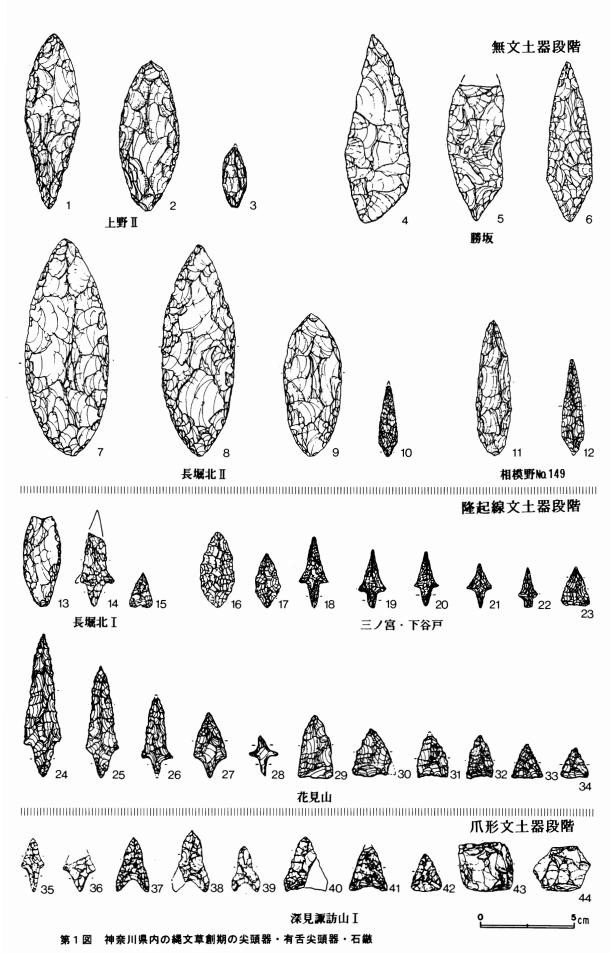
- ①土器+細石刃+尖頭器は、上野遺跡第1地点第Ⅱ文化層、勝坂遺跡、寺尾遺跡第Ⅰ文化層
- ②土器+尖頭器は、相模野No. 149遺跡L1S上部文化層、宮ケ瀬遺跡群北原遺跡
- ③細石刃+尖頭器は、長堀北遺跡第Ⅱ文化層
- ④尖頭器のみは、栗原中丸遺跡第 I 文化層、宮ケ瀬遺跡群馬場遺跡

これらの石器群に見られる組成の差は、遺跡の機能差も反映されているものと考えられ、細かな時期 差に置き換える事は難しい。

層位的には、L1S中部から上部が主体となり、一部では漸移層から富士黒土層下部にまで及ぶものもある。宮ケ瀬遺跡群北原遺跡では、上杉氏らによるテフラナンバーY-139直上から土器と尖頭器が出土している。Y-139は、相模野台地ではL1S上部の赤いスコリアに対比されるが、このスコリアの直上が本来の出土層位であろうと考えられる。土層形成環境の違いを考慮するべきであろう。

これらの石器群は尖頭器を主体としていることから神子柴系石器群として評価できる石器群であるが、石刃や彫器の欠落など典型的な神子柴系石器群とは言い難い側面も持っている。さて、そこで、その内容を詳細に検討する余裕がないが、有舌尖頭器の共伴について考えてみたい(第1図)。

上野遺跡では、尖頭器10、細石刃18、細石刃核2、無文土器等が出土している。この中には、有舌尖



頭器が認められないが、1の尖頭器は基部の作り出しが丁寧であたかもなかごとして装着を意識した基部の形態である。勝坂遺跡では無文土器21、尖頭器12、細石刃核1、同削片1、その他掻器、削器等が出土している。尖頭器は、欠損品が多く完形品は僅かに1点のみである。したがって、この残された石器のみで判断することは危険であるが、基部の加工がなかごを意識したものもあり $(4 \sim 6)$ 、6 などは初源的な有舌尖頭器の形態としてよいものかもしれない。

長堀北遺跡第Ⅱ文化層では、尖頭器13、細石刃52、細石刃核2、削片11などが出土している。10の有舌尖頭器は同文化層の水洗選別の際検出されたものであるが、ロームのこびりついていることから同一文化層の可能性が高いとしている。相模野No.149遺跡L1S上部文化層では、尖頭器4、掻器1、削器3などとともに12の有舌尖頭器が排土から採集されたものである。

筆者は勝坂については形態的に尖頭器のバラエティーに含め、長堀北と相模野No. 149例については排土中の出土であることから共伴については確実でないとの立場でいた。6・10・12の形態は、身部と舌部の転換点が認められ、かえりがないものの舌部は確実に意識されたものであると評価すれば、有舌尖頭器の初源形態として認められなくはない。また、次の隆起線文土器に伴う有舌尖頭器の中には認められない形態であることも言えそうである。他地域ではどうであろうか。前田耕地遺跡や多摩ニュータウンNo. 796遺跡や弥三郎第2遺跡など、尖頭器が多量に出土している石器群の中には舌部が不明瞭な尖頭器は認められなくはない。しかしながら、有舌尖頭器として完成された形態とは認められない。始原的な舌部未発達の「有舌尖頭器」とこれまで評価されていた石器については、尖頭器の基部の装着に伴うものであり、「通時間的存在の尖頭器形態」(栗島1991)と見るべきものも多く、形態的な安定性をもって有舌尖頭器と器種認定すべきであろうと考える。したがって、ここでは勝坂遺跡例については、尖頭器の多様な形態の中のひとつと位置付けておきたい。

4. 隆起線文土器段階の石器群と石鏃

隆起線文土器を伴う石器群の出土層位は、漸移層~富士黒土層下部である。無文土器段階との層位的な出土例を持つ、上野遺跡第 I 文化層や相模野No. 149遺跡FB下部文化層、長堀北遺跡第 I 文化層などの相模原面での層位が安定している場所では富士黒土層下部が本来の出土層位ではないかと考えている。 丘稜部では、吉岡遺跡群や慶應湘南キャンパス内遺跡などのように漸移層を中心になっていることから、その立地する場所によって土層堆積環境の違いを考慮する必要がある。したがって、各遺跡毎の出土層位を直接対比し、編年的な位置付けとすることは難しいこともある。

主な石器群は、相模野台地では、上野遺跡や相模野No.149遺跡、長堀北遺跡(相模原面)、吉岡遺跡群や湘南藤沢キャンパス内遺跡、多摩丘陵では、花見山遺跡、多摩ニュータウンNo.426遺跡、西相模地域では、三の宮・宮の前遺跡、三の宮・下谷戸遺跡などがある。

上野遺跡は、富士黒土層では有舌尖頭器 4、尖頭器 8、石斧 5 などが出土しているが、石鏃は認められていない。広大な面積を調査した湘南藤沢キャンパス内遺跡では、住居状の竪穴遺構が検出されているなど隆起線文期の良好な石器群であるが石鏃は伴わない。三の宮・宮の前遺跡では有舌尖頭器の製作跡と捉えられるが、石鏃はない。

石鏃が伴うとされる遺跡は、長堀北遺跡、三の宮・下谷戸遺跡、花見山遺跡など比較的多くはない。 そして、これらの石鏃の出土状況をみると長堀北については、集中地点の外縁部で層位的に若干上位で あることから混在の可能性を否定できない(15)。石材が信州産と思われる透明の黒曜石であることも否 定的な根拠の一つとなろう。三の宮・下谷戸遺跡は有舌尖頭器の製作跡で20,000点の関連資料が出土し ているが、石器集中地点から1点のみ石鏃が出土している(23)。出土状況から共伴の可能性が高いと思 われるが遺物整理が行われておらず、報告書刊行後に検討を加えたい。花見山遺跡では、尖頭器30、有 舌尖頭器54、石鏃19と石鏃が最もまとまって共伴したとされる遺跡である。石鏃は二等辺三角形での形 態で(29~34)、石材も小型の有舌尖頭器と同じチャートが主体となっている。早期以降の石鏃は黒曜石 を主体とし、形態的にも異なっている。石鏃と有舌尖頭器をはじめとするその他の器種とは分布状況が ほぼ重なっている。こうしたことから、花見山遺跡においては、隆起線文土器と石鏃は伴っていると考 えるのが妥当であろう。しかしながら、神奈川県内の隆起線文段階の石器群の中では石鏃は伴わないか 極めて不安定な在り方であり、唯一花見山遺跡をもって石鏃が伴う段階と考えるのは難しい。花見山遺 跡は、住居状の遺構や多量の土器、石器から多摩丘稜の中でも特異な拠点的な集落であったと考えられ、 湘南藤沢キャンパス内遺跡をはじめとする県内の他遺跡よりも同一時期において最も速く石鏃が導入さ れた遺跡であったのであろうか。石鏃の出現についても、平面分布、垂直分布、石材組成、石器製作技 術など様々な視点から詳細に検討を加えなければ結論は導き出せない。

5. 爪形文土器段階の石器群

隆起線文土器段階に続く石器群は良好なものは少ない。深見諏訪山遺跡第Ⅰ文化層ぐらいであろうか。 深見諏訪山遺跡では、尖頭器、有舌尖頭器(35・36)、多量の石鏃(37~42)及びその未成品、石鏃製作に 関する楔形石器(43・44)が出土している。出土層位は富士黒土層の中部から下部にかけてで、隆起線文 土器段階よりは上層である。この段階の石器群は、尖頭器、有舌尖頭器などの前段階の器種を残しつつ も、より縄文時代の石器の代表である石鏃が明確な形で主体的となることであろう。

6. まとめにかえて

神奈川県の細石刃段階から縄文草創期の石器群について若干の検討を行ったが、細石刃石器群以降に ついでは、石器製作過程の各工程が残されにくく、石器製作技術の構造的な理解が難しい。相模野台地 において石器群を通史的な視点でみれば、この構造的な理解が難しいことが、まさしく縄文時代への転 換を表すのではないのだろうか。旧石器から縄文への転換点は様々な視点からの検討が必要で、原位置 論という考古学の原点に帰って、土器と石器の一括性に確認から検討しなければならないことを強く感 じた。今後の課題としておきたい。

紙面の都合により文献は割愛させていただきます。

引用・参考文献

白石浩之『旧石器時代の石槍』東大出版会1989 鈴木次郎「細石器一関東・中部地方を中心に一」『季刊考古学4』1983 砂田佳弘「相模野の細石器ーその発生と展開に向けて一」『神奈川考古24』1988

砂田佳弘「相模野細石器の変遷」『神奈川考古30』1994

諏訪間順「相模野台地における石器群の変遷について一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握」『神奈川考古24』 1988

諏訪間順「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ッ原遺跡B5遺跡B地点の研究』八ケ岳旧石器研究グル

堤 隆「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究13』1987

使用石材から見た旧石器時代と縄文草創期について

柴田 徹

1. はじめに

3月に行われた考古学講座のあと、寺尾遺跡と下総台地の草創期の遺跡である南原遺跡の石材について検討する機会があった。それら2遺跡の結果を加えて、使用石材の時期による違いを考察する。また、かながわと下総の比較からそれぞれの使用石材の地域的特性についても触れる。

2. 草創期における石材について

寺尾遺跡における草創期の石材の石質組成は、横浜市と藤沢市の中間の傾向を示し、大和市に近いと言える(表1)。特に、ガラス質黒色安山岩・チャート・硬質細粒凝灰岩の比率に明瞭に現れる。かながわにおいては、チャートの比率は多摩川方面との関係を推定するのに有効である。そのチャートが8.7%存在する事は、寺尾遺跡は多摩・武蔵野方面とかなり密接な関係を有していたことを示している。また、寺尾遺跡独特のものに黒色頁岩の存在がある。この黒色頁岩はその風化の様子などから、利根川でのみ採集できる黒色頁岩である。武蔵野東部など利根川に面する地域との関わりを推定することができる。チャートからの推定と方向的に合致するものである。

黒曜石がほとんど出土しない事は、今回検討したかながわの草創期の全遺跡に共通の事実である。 この、黒曜石がほとんどもしくは全く出土しない事は、下総台地の市原市の南原遺跡においても同様 である。

南原遺跡とかながわの縄文草創期の各遺跡とを比較すると、ガラス質黒色安山岩は共通に多く出土する石材であるが、いわゆるトロトロ石は南原遺跡においてのみ多量に出土し、かながわの各遺跡では出土しない。黒色頁岩は南原遺跡においては多く出土するが、かながわでは寺尾遺跡を除いて出土していない。一方、硬質細粒凝灰岩はかながわの各遺跡でのみ多量に出土するが、南原遺跡では全く出土しない。また、ガラス質黒色安山岩は、かながわ出土の大半は肉眼的特徴から箱根産のものと推定される。下総台地の南原遺跡出土のものは肉眼的特徴および蛍光X線分析による微量成分の特徴から、利根川産と大洗産のものであるとの結論が得られている。各使用石材の採集可能地を考慮すると、お互いにかつての利根川を越えない範囲で分布していると結論づけることができる。

3. 旧石器時代と縄文草創期の使用石材について

大和市の遺跡では旧石器時代を通じて黒曜石が多く、その他として硬質細粒凝灰岩・ガラス質黒色安山岩・ホルンフェルスが一定量多い、ということが旧石器時代の基本的な石質組成と言える。しかし、L2-B2Uのようにほとんど全ての98.8%が黒曜石である時期や、B3のように黒曜石が無くガラス質黒色安山岩が90%とほとんどを占める時期もある(表2)。

表 1 観察した草創期の遺物の石器組成表

	遺跡名	ガラス 質黒色 安山岩	トロロ ト石	硬質 細粒 凝灰岩		5 17-1	珪質 頁岩	頁岩		ホルソ フェルス	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬 質 頁岩	その他	≣†
横浜市	花見山	137 22. 7%		_87 14. 4%		256 42. 5%		2. 2%		27 4. 5%	7 1. 2%	0.0%		0. 5%	10 1. 7%	603 100. 0%
綾瀬市	寺尾 第1文化層	416 35. 5%		515 43. 9%		102 8. 7%		5 0. 4%	34	88		0. 3% 0. 3%		0.3%	7	1173 100. 0%
大和市	月見野上野 1地点1文化	2		13 36. 1%		6	1	8		5 13. 9%					2. 8%	36 100. 0%
	長堀北1 1文化層 相模野149	20. 0% 21		10. 0% 1	1		5. 0%	5. 0%		40.0%		5. 0% 6			15. 0%	20 100. 0% 29
藤沢市	上部	72. 4 % 89		3. 4% 176						8		20. 7%				100. 0% 275
ESK// (113	慶応V区	32. 4% 57		64. 0%						2. 9%	1	0. 7%				100. 0% 61
	慶応・区	93. 4%		1. 6 % 105		1				3. 3% 22	1. 6%	4			3	100. 0% 146
	慶応Ⅲ区	7. 5% 3		71. 9% 16		0. 7%				15. 1% 2		2. 7%			2. 1%	100. 0% 21
		14. 3% 740		76. 2%		365	52	27	34	9. 5 % 162		16		6	24	100. 0% 2364
	計	31. 3%		38. 7%		15. 4%		1. 1%	1. 4%	6. 9%	0. 3%	0. 7%		0.3%	1.0%	100. 0%

表 2 大和市の旧石器時代の石質組成表

層位	ガラス 質黒色 安山岩	トロ トロ 石	硬質 細粒 凝灰岩	流紋岩	チャート	珪質 頁岩	頁岩	黒色	ホルン フェルス	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬 質 頁岩	その他	ā†
L1S-B0	90		172	4	3	1	_ 2		100	8	1042			2	1424
	6. 3%		12. 1%	0.3%	0. 2%	01%	0. 1%		7.0%	0.6%	73. 2%			0. 1%	100. 0%
B 0 - L 1 H	76		76	47	3	2	23		46		447			20	740
	10. 3%		10. 3%	6. 4%	0. 4%	0. 3%	3. 1%		6. 2%		60. 4%			2. 7%	100.0%
B 1	9		35		8		2		4	26	136				220
	4. 1%		15. 9%		3. 6%		0.9%		1. 8%	11. 8%	61.8%			0.0%	100.0%
L 2 – B 2 U							4			1	574			2	581
	0.0%			0.0%	0.0%		0.7%		0.0%	0. 2%	98. 8%			0.3%	100.0%
В 3	63		2		1		1		_ 2					1	70
	90.0%		2. 9%		1. 4%		1. 4%		2. 9%		·			1. 4%	100.0%

表3 寺尾遺跡の旧石器時代の石質組成表

層位	ガラス 質黒色 安山岩	トト石 日日	硬質 細粒 凝灰岩	チャート	珪質 頁岩	頁岩	黒色 頁岩	ネルン フェルス	珪質 岩	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	その他	
第2文化層	7		24	115				51		20				217
L 1 H	3. 2%		11. 1%	53.0%				23. 5%		9. 2%				100.0%
第3文化層			1	1						109				_111
B 1 U			0.9%	0.9%						98. 2%			0.0%	100.0%
第4文化層			53				213			2			5	_ 273
B1L-L2			19. 4%				78. 0%			0. 7%			1. 8%	100.0%
第5文化層	1							1					4	6
B 2 L U	16. 7%							16. 7%					66. 7%	100. 0%
第6文化層 B3U	10		18	_ 33				1	, in the second	1827			4	1893
B 3 U	0. 5%		1. 0%	1. 7%				0. 1%		96. 5%			0. 2%	100. 0%

表4 下総の草創期・旧石器時代の石質組成

		ガラス質黒色	F \Box	細粒	流紋岩	チャート	珪質 頁岩	頁岩	黒色 頁岩	ホルン フェルス	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬 質 頁岩	その他	≣†
		安山岩	石	凝灰岩												
市原市	草創期	629	413			120		1	141	120					162	1638
	南原	38. 4%	25. 2%			7. 3%		0. 1%	8.6%	7. 3%	3. 2%				9. 9%	100.0%
下総	≡上∼≡中	405	49	9		185		62	219	171	294	153	46	155	153	1901
地域		21. 3%	2. 6%	0. 5%		9. 7%		3. 3%	11. 5%	9.0%	15. 5%	8. 0%	2. 4%	8. 2%	8.0%	100.0%
	⊪下~Ⅳ中	420	33	1		26		12	30	155	181	390	34	310	76	1668
		25. 2%	2. 0%	0. 1%		1. 6%		0. 7%	1. 8%	9. 3%	10. 9%	23. 4%	2.0%	18. 6%	4. 6%	100.0%
	ⅳ눆∼ѕ	69	1			5			149	15		84	17	11	3	354
		19. 5%	0. 3%			1. 4%			42. 1%	4. 2%		23. 7%	4.8%	3. 1%	0.8%	100.0%
	VI	29	4	2				2	41	8	43	141	5	59	23	357
		8. 1%	1. 1%	0.6%				0.6%	11. 5%	2. 2%	12. 0%	39. 5%	1. 4%	16. 5%	6. 4%	100.0%
	VII	94	4	1		53		_8	57	83	33	28	17	328	123	
		11. 3%	0. 5%	0. 1%		6. 4%		1. 0%	6.9%	10.0%	4. 0%	3. 4%	2. 1%	39. 6%	14. 8%	100.0%

綾瀬市の寺尾遺跡では、第3文化層と第6文化層はほとんど黒曜石のみの時期であるといえる。それに対して、第2文化層ではチャートが50%以上を占めるのに、黒曜石は9%しか占めていないし、第4文化層では、黒色頁岩が78%を占めており、黒曜石は0.7%を占めるに過ぎない。各層位毎に見るとごく少数の石質の石材が大半を占める傾向が顕著であり、しかも層位によって、推定される採集可能地の著しく異なる石材が大半を占めることが寺尾遺跡の特徴のようである(表3)。

相模野台地における縄文草創期においては、黒曜石が使用されなくなるかわりに、ガラス質黒色安山岩と硬質細粒凝灰岩が多用される事が特徴と言えそうである。

市原市の南原遺跡においても、旧石器時代において出土量の多かった黒曜石・硬質頁岩が草創期に おいては全く出土せず、かわってガラス質黒色安山岩とトロトロ石を中心とする石質構成に変化して いる(表4)。

4. おわりに

前回と今回行った少数の遺跡の分析のみで言えば、黒曜石が使用されずに、かわってガラス質黒色 安山岩ともう1,2種類の石材を主とする石質構成が、南関東における縄文草創期の基本的な石質構 成と言えるのではないだろうか。地域的にも遺跡の数的にも今回の検討では不十分であり、さらに多 くの遺跡を検討することにより、より精度の高い結論を得ることができると思われるが、今後の課題 としたい。

最後になりますが、寺尾遺跡の遺物の観察と観察結果を用いることをお認めいただいた(財)かなが わ考古学財団と南原遺跡の資料を検討する機会と現段階までの成果を用いることをお認めいただいた 東京大学文学部考古学研究室の大塚達朗氏には感謝するものであります。

参考・引用文献

- 柴田 徹「かながわにおける縄文草創期の使用石材」『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る』神奈川県考古学会1996
 山本 薫・他「武田石高遺跡(茨城県)から出土したガラス質黒色安山岩製石器の石材産地について」『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会1996
- **柴田 徹・他「石材利用の検討から見た縄文草創期の様相について」**『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』日本文 化財科学会1996

遺跡に持込まれた石器石材について

諏 訪 間 伸

1. はじめに

遺跡に持込まれた石器の石材は柴田氏の分析(註1)によると、硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩、チャート、ホルンフェルス、珪質頁岩、頁岩、流紋岩、黒曜石、珪質岩、珪質細粒凝灰岩、砂岩、その他の順になっている。この内、地域ごとで使用されている石材に差異が生じている。このことから「草創期かながわ人たち」について何か言えるのだろうか?

註1:柴田 徹「かながわにおける縄文草創期の使用石材」『かながわの縄文文化の起源を探る』1996

2. 地域の特徴

神奈川県内を水系や地形、遺跡の数等で分類すると、多摩丘陵地域、三浦半島地域、相模野台地地域、丹沢山地北東部地域、丹沢山地南東部および大磯丘陵地域、箱根山地東部地域の7地域に分けることができる。

(1)多摩丘陵地域(川崎市、横浜市、鎌倉市)

多摩川、鶴見川、帷子川、柏尾川等を中心とする多摩丘陵に分布している。主な遺跡には花見山遺跡、黒川東遺跡等があり、槍先形尖頭器、有舌尖頭器、打製石斧、石鏃、錐器、削器等が確認されており、石鏃については他地域ではほとんど例がない。石材はガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩、チャート、珪質頁岩等で、特にチャートが多用されている点は、他地区と異なっている。

(2)三浦半島地域(横須賀市、三浦市)

三浦半島は海成段丘状の丘陵上に分布している。主な遺跡には長井台地遺跡群があり、有舌尖頭器、 尖頭器状石器が出土している。石材はチャート、砂岩、玄武岩、頁岩等が使われている。

(3)相模野台地地域(相模原市、大和市、座間市、海老名市、綾瀬市、藤沢市、茅ケ崎市、寒川町)

相模野台地は西側が相模川、東側が多摩丘陵に挟まれた洪積台地で、旧石器時代から数多くの遺跡が小河川ごとに分布している。主な遺跡には月見野遺跡群、寺尾遺跡、吉岡遺跡、南葛野遺跡等数多くの遺跡があり、細石刃、削片系舟底形細石核、槍先形尖頭器、打製石器、礫器、削器、叩石、有舌尖頭器等が出土している。石材はより古い時期は黒曜石、チャート、頁岩等で、特に黒曜石が多用されている。一方、新しい時期は硬質・珪質凝灰岩、ガラス質黒色安山岩、玄武岩、粘板岩、砂岩等で、黒曜石は激減し、代わりに凝灰岩類、ガラス質黒色安山岩が多用する。また、北部ではチャート、玄武岩、硬質細粒凝灰岩が多く、南部では珪質頁岩、頁岩が多く使用されている。

(4) 丹沢山地北東部地域(相模湖町、城山町、藤野町、清川村)

丹沢山地の北東部の山地や山地から平坦地にかかる丘陵部に分布している。主な遺跡には宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡、南遺跡、馬場遺跡、ナラサス遺跡等があり、槍先形尖頭器、礫器、掻器、削器、叩石

等が出土している。石材は珪質細粒凝灰岩、硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩を中心に、黒曜石、 チャート、ホルンヘェルス等が使われている。

(5) 丹沢山地南東部および大磯丘陵地域(厚木市、伊勢原市、秦野市、平塚市、大磯町)

丹沢山地南東部の丘陵および南東に張出した台地上、大磯丘陵上およびその縁辺部に分布している。 主な遺跡には三ノ宮・宮ノ前遺跡、三ノ宮・下谷戸遺跡があり、有舌尖頭器の製作遺跡として注目 されている。石器は有舌尖頭器、槍先形尖頭器、打製石斧、掻器、削器、礫器等で、石材はガラス質 黒色安山岩、黒曜石、硬質細粒凝灰岩、ホルンフェルス等が使われており、中でもガラス質黒色安山 岩が多用され、遺跡に原石で持込まれるか、一次加工された剥片で持ち込まれるかの両方がある。

(6)箱根山地東部地域(小田原市、南足柄市)

箱根山地東部の丘陵に分布し、今のところ遺跡数は少なく、天神山台遺跡、関東学院大学遺跡で神子柴系石器群の石斧、尖頭器が出土している。石材はガラス質黒色安山岩、輝緑岩が使われている。

3. 使用石材

使用石材は硬質細粒凝灰岩はほぼ全域で認められ、相模川水系(相模川、桂川、目久尻川、相模野礫層等)、酒勾川のものが使われている。ガラス質黒色安山岩も数多く使われており、箱根系(早川および小田原西方海岸、白銀山、明神岳等)のものである。チャートは多摩川および武蔵野礫層中のものが使われいる。その他、相模川はホルンフェルス、流紋岩、珪質岩、珪質細粒凝灰岩、頁岩、砂岩等であり、多摩川はホルンフェルス、珪質頁岩、頁岩等である。一方、黒曜石は時期的に変化があり、伊豆の柏峠産から神津島産へと変化する傾向が伺える。

4. まとめ

「草創期かながわ人たち」はどこの石をどのように使っていたのか?。やはり地元の石で石器を作り、そして、猟場で別な石に出会い、別な集団から他の石の情報を得たり、石器に適した石材を入手したのではないか。そして、彼らは箱根周辺にあるガラス質安山岩を知り、伊豆や神津島の黒曜石の入手にも成功する。また、北方の多摩川産のチャートを入手したのではないだろうか。

彼らの領域(行動範囲)での他集団との交流(交易)によって情報交換、物々交換がなされ、石材も直接か間接で獲得するようになる。したがって、石材、器種等に集団差が顕著に現れてくる。

最後に一番遠くにある神津島の黒曜石について少し触れておきたい。最終氷期には海面が-100m以上下がったと云われいる(大場:1983)。また、海洋底堆積物中の浮遊性有孔虫の化石から黒潮の流れが、 $20,000\sim16,000$ 年は現在よりも南下し、 $15,000\sim14,000$ 年には蛇行してやや北上することがわかってきている(第1図)(大場・安田:1992,尾田・嶽本:1992)。また、ヤンガードライアス寒冷期(寒の戻り)の約10,700年前にも海面が下がり、これらのことより、神津島までは現在のような黒潮の荒波がなく、優れた海洋渡航技術を持たなくとも、島伝いや島状の浅瀬を回って行くことで伊豆半島

南端から約20km、房総半島から大島まで約25kmで渡ることが可能だった。そして、より良い石材を求めた結果、神津島まで到達したのではないか。

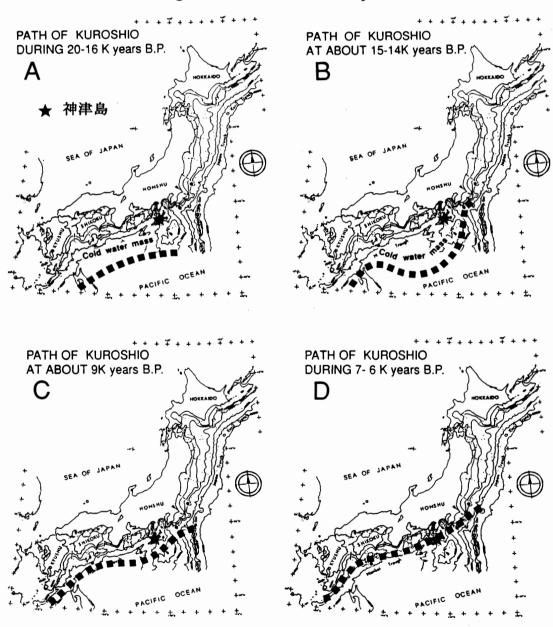
参考文献

大場忠道「最終氷期遺構の日本海の古環境」『月刊 地球 5-1』1983

大場忠道・安田尚登「黒潮域における最終氷期以降の環境変動」『第四紀研究 31-5』1992

尾田太良・嶽本あゆみ「浮遊性有孔虫からみた黒潮流域における過去2万年の海洋変動」『第四紀研究 31-5』1992

PATH OF KUROSHIO during the last 20,000 years



第1図 過去2万年間の各時期における黒潮流路の変遷 尾田太良他「浮遊性有孔虫からみた黒潮流域における過去2万年の海洋変動」を転載・一部加筆

かながわの縄文時代草創期の遺跡分布

加藤勝仁

1. 立地から見たみた分布

神奈川県内の地形を①県東部の多摩丘陵から三浦半島にかけての丘陵部及び台地、②県央部の相模川東岸添いの河岸段丘により構成される相模野台地を中心とする丘陵部及び台地、③県西部の箱根・丹沢山地と大磯丘陵及び台地に大きく区分して、それぞれの地域の縄文時代草創期について見てみる。調査例の多寡の影響も大きいが全体として、県東部・県央部に遺跡が多く存在し、県西部は少ない(表1)。また旧石器時代細石刃石器群や LIH層相当の石器群の遺跡数と比較してみると、県央部に比べて、県東部・県西部では旧石器時代の遺跡数が少なく、縄文時代草創期になり遺跡数が増加しているように見える。相模野台地において、縄文時代草創期になると丘陵部へも遺跡の分布が広がるとの指摘が桜井氏からなされているが、県東部・県西部は丘陵・山地部分が多いこととあわせて、全体的にその傾向があることが理解される。しかし草創期の遺跡の増加は尖頭器・有舌尖頭器等の単独出土遺跡の増加が一因でもあり、必ずしも単純に旧石器時代から遺跡が増加した考えることはできない。また、県央部の丘陵部に存在し、土器を含めた遺物集中地点の存在する吉岡遺跡D区や慶応湘南藤沢キャンパス内遺跡は下位に旧石器時代の文化層をもち、縄文時代草創期から利用されはじめたのではないことは注意される。それは台地部分の月見野上野遺跡や代官山遺跡等でも同様である。

所謂隆起線文土器以前の時期の遺跡分布についてみると、やはり県央部に集中している。県東部で

表1 神奈川県内の縄文時代草創期遺跡数

		①県東部	②県央部	3県西部
	爪形文・多縄文土器出土遺跡	3	7	+
縄文	隆起線文土器出土遺跡	1 0	8	5
大時 代	有舌尖頭器単独出土遺跡	5 3	2 0	1 8
草創	尖頭器単独出土遺跡	4 9	8	1 0
期	隆起線文土器以前の土器出土遺跡	1	4	1
	隆起線文土器以前石器群出土遺跡	0	4	2
旧	細石刃石器群出土遺跡	5	3 4	1
石器	L1H層相当層石器群出土遺跡	1 6	3 7	5

遺跡の集成にあたっては、神奈川県立埋蔵文化財センター旧石器時代研究プロジェクトチームの集成を基に、坂本1996等の集成を加え一部改変して集成した。①地域の縄文時代草創期遺跡については地形による区分を行政における区分に優先させ、坂本1996で対象とされた東京都側の多摩丘陵の南側分の一部も加えて集計している。

単独出土している尖頭器の中にこの時期のものが存在すると思われるが、土器や遺物集中地点など生活址として捉えられるものは少ない。削片系細石刃石器群と「無文土器」が共伴している遺跡としては、県央部に勝坂遺跡、月見野上野遺跡第1地点がある。上野遺跡第1地点では下位に重層した旧石器時代の文化層を持ち、旧石器時代と同じ立地をしている。隆起線文土器以前の可能性が提唱されている寺尾遺跡、相模野№149遺跡も同様に下位に旧石器時代の文化層を持っており、尖頭器を中心とする隆起線文土器以前と考えられる石器群も下位に旧石器時代文化層をもつ場合が多い。しかし、勝坂遺跡は現状で河川との比高差が3mと低位の台地に立地しており、細石刃石器群から縄文時代草創期にかけての低位の遺跡立地の特徴を示していると考えられる。

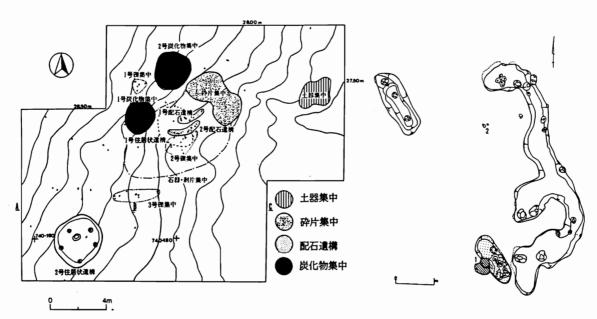
隆起線文土器の時期の遺跡分布についてみてみると、有舌尖頭器の単独出土遺跡では県東部は県央部以上の遺跡数がある。前述した草創期における丘陵部の遺跡の増加のあらわれであろう。しかし土器を出土する等遺物量の豊富な遺跡で考えると県東部では花見山遺跡など一部にとどまり、拠点的な遺跡は県央部のほうが多いと思われる。

隆起線文土器以降と考えられる爪形文土器・多縄文土器についてみてみると、神奈川県内全体として非常に出土遺跡が少ない。また分布も再び県央部に集中する。県東部の遺跡のものは、上作延南原遺跡や山居遺跡など井草式土器等次の時期の撚糸文土器群と関連をもつと考えられるものがあり、撚糸文土器群の時期における県東部の遺跡増加と関わるものであろう。

2. 遺跡の様相から見た分布

縄文時代草創期の遺跡には、尖頭器または、有舌尖頭器が単独で出土する遺跡が多い。これらは狩猟に用いられ、狩猟の場に残されたと考えるのが自然である。これらの尖頭器、有舌尖頭器は黒曜石を用いたものは少なく、所謂在地の石材を用いたものが多い。柴田氏の今回の報告によると花見山遺跡ではガラス質黒色安山岩のほかチャートが主要に用いられ、多摩川水系起源と考えられるチャートが石材として多く利用され、相模野台地・県西部ではガラス質黒色安山岩のほか相模川水系起源と考えられる硬質細粒凝灰岩が石材として多く用いられているということである。

これらの尖頭器は花見山遺跡等拠点と考えられる遺跡ででまとまって出土しているほかに、三ノ宮下谷戸遺跡で花見山型有舌尖頭器の製作址が発見されており、同じ形態の有舌尖頭器が大量に製作されている。縄文時代草創期の時期は隆起線文土器以前と考えられる時期を中心に石器の製作址と考えられる遺跡が特徴的に存在する。三ノ宮下谷戸遺跡は後出のものであるが、このような同じ形態の石器の大量製作は遺跡が主要石材である黒色ガラス質安山岩の産地からやや離れていること等も考えあわせ、計画的な大量消費を前提としたものと思われる。前述のように、それぞれの地域で入手しやすい石材を石器に利用していたことを考えると、他地域の消費者の需要のために大量に製作していたとは考えがたい。自らもしくは自らが属する集団の需要のために製作を行っていたと考えられる。はっきりとした定住の痕跡が認められないことから、特定期間に一時的な大量の需要があったと想定すると、多数の人数によるによる季節的な狩猟・漁撈等の行為も想像される。また吉岡遺跡群D区におい



第1図 藤沢市南鍛冶山遺跡 1号遺物集中部

第2図 綾瀬市吉岡遺跡D区埋納遺構

て、2枚の川原石の下に2点の礫斧が重なるように出土している。報告者はこれを埋納遺構と考えて おり、将来の一時的な道具の利用に備えた遺構であるかもしれない。

また、旧石器時代にほとんど見られなかった居住の痕跡を示すと考えられる住居跡状遺構が縄文時代草創期には検出されている。県内で竪穴住居状遺構とされているものは、遺物の量と遺構の存在から、一定期間の居住の痕跡がうかがわれる。しかし掘りこみ等がしっかりしていない例が多いことや南鍛冶山遺跡や、東京都の前田耕地遺跡においてテントの付属施設とも考えられる配石が検出されていることなどから、年間を通した長期的な居住とは異なった一時期の居住の施設の場合も多かったと考えられる。このように遺跡の様相をみてみると、旧石器時代の遊動の生活とも縄文時代早期以降の定住の生活とも異なる生活形態があったことが想定される。

参考文献

旧石器時代研究プロジェクトチーム「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川の考古学の諸問題』かながわの考 古学第4集1994

坂本 彰「槍と土器」『考古論叢神奈川』第5集1996

諏訪間伸「伊勢原市内における旧石器・縄文時代草創期の遺跡について」『文化財ノート』第3集1994

藤沢市内における縄文時代草創期の遺跡の立地について

望月芳

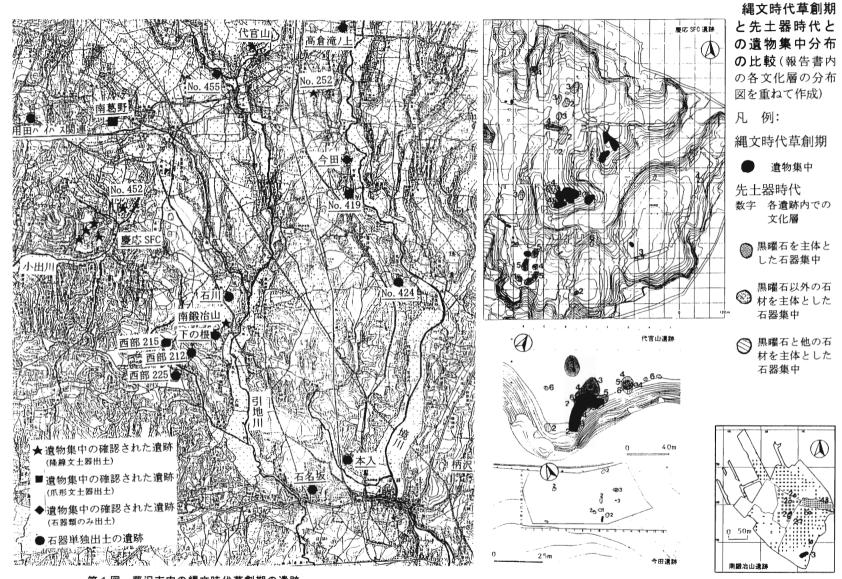
藤沢市内では、近年の発掘調査の増加に伴い、多くの調査成果があがっているが、そのひとつに、縄文時代草創期前半、特に隆線文土器・爪形文土器・多縄文土器の時期(以下、この時期を草創期前半と記す)の遺跡の調査例の増加がある。1996年4月現在で調査報告や概報等にてその存在が知られる遺跡は20ヶ所を数える。これらの遺跡は出土遺物により、有茎尖頭器などの石器類の単独出土の遺跡とひとつ以上の遺物集中(土器片出土を含む)が確認された遺跡とに分けられる。これらを遺跡内での立地をみると、段丘斜面に遺物集中部が、段丘平坦部から斜面部にかけて石器類の単独出土が見られる傾向がある。特に広範囲を調査している慶応SFC遺跡をもとに、遺物集中部の分類を行い、「居住地」「野営」「狩猟場」などで構成されるセツルメントシステムの可能性が考えられている。

藤沢市内の草創期前半の遺物集中の確認された遺跡をみると、いずれも中小河川の右岸に位置し、中小河川沿いの段丘斜面と河川よりやや奥に入る支谷部とに分けられる。前者には代官山遺跡や南鍛冶山遺跡、今田遺跡、No. 419遺跡、No. 455遺跡があたり、後者には慶応SFC遺跡、南葛野遺跡やNo. 252遺跡があたる。慶応SFC遺跡は小出川の右岸にあたるが、小出川右岸の南向斜面には集中はみとめられず、小出川右岸の斜面傾斜がやや急であることもあろうが、むしろ支谷に面する斜面に集中が形成されている。

次に遺跡内での遺物集中の立地をみると、舌状の張り出しと平坦部からの微傾斜面に分類できる。慶応SFC遺跡 I 区A~D集中・Ⅲ区C~E集中が前者、それ以外の遺物集中は後者にあたる。また、舌状の張り出しでも、代官山遺跡やNo. 455遺跡、No. 419遺跡、慶応SFC-I 区A~D集中・Ⅲ区C~E集中は小規模な張り出しであるのに対し、南鍛冶山遺跡、今田遺跡は規模の大きな張り出しの一部に集中が形成されている。ただ、いずれも南向斜面に形成される傾向にある。南葛野遺跡・今田遺跡は南向以外の斜面にあるが、両遺跡とも調査区南端に遺物集中が確認されており、南側にひろがる可能性は高い。

これらの傾向をみる限り、必ずしも河川に面するわけではなく、むしろ南向の微傾斜面に遺物集中がみられる。では、同じ遺跡内において、先土器時代(岩宿時代)の遺物集中はどのように分布しているだろうか?

慶応SFC遺跡の先土器時代の分布は遺跡全体にひろがるものの、支谷に面した斜面より、小出川右岸及び遺跡北側を流れる支流側に遺物集中が形成されている。先土器時代の各文化層は、草創期前半の分布とほとんど重ならない。特に慶応SFC-I区をみると、同じ舌状の張り出し部に遺物集中が確認されているが、第4文化層(L2・B2U)の集中部が張り出し部の西側に分布するのに対し、草創期前半の集中部は南側(A~D集中)と東側(E集中)とに分布し、互いの集中は重なりを持たない。また、Ⅲ区C~E集中の確認された張り出しには、先土器時代の遺物集中はみ



第1図 藤沢市内の縄文時代草創期の遺跡

9

とめられない。また段丘上部でも、先土器時代と草創期前半の遺物集中は重なりを持たず、南 向斜面に必ずしも限られない。むしろ、段丘最上面に近いところに先土器時代の遺物集中があ り、傾斜面に草創期前半の遺物集中が分布する傾向が見える。

南鍛冶山遺跡は遺跡東半分に重なりなく広がり、段丘最上面に近いところに先土器時代の遺物集中があり、草創期前半の遺物集中は傾斜面最下の先土器時代の遺物集中と重複する。

代官山遺跡の先土器時代の遺物集中は重複関係を持っているが、全体とすれば、細石刃石器 群以前が遺跡の形成される張り出し東側に、草創期前半の遺物集中・細石刃石器群の遺物集中 が、遺跡の形成される張り出し中央に分布し、重複している。

また、今田遺跡やNo.419遺跡、No.455遺跡の場合は、集中部は先土器時代のものと草創期前半のものは重ならないものの、10m前後にいずれも近接している。

実は縄文時代早期以降の分布を遺跡内で見ても、代官山遺跡では、縄文時代早期・中期の分布が草創期前半の分布とは重なるものの先土器時代の分布とは重ならない。縄文時代早期の遺物は草創期前半の集中部を含むように張り出し部に分布し、中期・後期は、草創期前半の集中部と重なる部分に遺物が分布している。また慶応SFC遺跡では、張り出し部では縄文時代早期以降の分布と近接するが、それ以外では分布が異なっている。I区A~D集中と縄文時代早期以降の遺構分布と比較すると、早期の遺構はちょうど、草創期前半の集中部分布の間に中心があり、縄文時代中期の遺構は草創期前半南側の集中に重なっている。また、Ⅲ区C~E集中と縄文時代早期以降の遺構分布と比較すると、早期の遺構は草創期前半の遺物集中の東側にあり、縄文時代中期の遺構は草創期前半の遺物集中の中間に分布する。これに対し、南鍛冶山の縄文時代早期以降については、早期の遺構は確認されていないものの、遺跡北側に遺物の分布の中心があり、中期後期に関しても、遺構・遺物は草創期前半の集中部より北西に分布の中心を持つ。

このように、先土器時代と草創期前半の遺物集中部の分布を比較してみると、若干の重なりはあるものの、明らかに分布傾向が異なっている。先土器時代の遺物集中に比べ、草創期前半の遺物集中は、段丘の下方に位置し、規模の小さな張り出し部でも、同様に遺物集中が形成されているものの、やはり分布は異なっている。これに対し、縄文時代早期以降の分布と比較してみると、小規模な張り出し部でみる限り、草創期前半の分布と重複近接している。

今回は遺物集中の立地という点で遺跡を見てきた。確かに、先土器時代全般と草創期前半という比較は検討の余地があろうし、あくまで藤沢市内の中での事象の分析にすぎない。また、各遺跡の各遺物集中毎に様々な面を持ち合わせており、より詳細に再考していく必要があろう。しかし、これらのことは草創期前半を考えていく上で、遺物の面ばかりでなく、立地も遺跡の性格をさぐる手だてのひとつとなることを充分伺わせる。

参考文献(紙面の関係上、概報・報告書類は省略させていただきます)

桜井準也「相模野地域における縄文時代草創期遺跡のあり方一隆線文期の評価をめぐって一」『考古論叢神奈河 5』1996

湘南考古学同好会『藤沢の縄文時代草創期を考える会資料・発表要旨』1993

藤沢市教育委員会『平成7年度藤沢市文化財展 石の上にも三万年ー資料集ー』1995

草創期の遺構と定住化-南関東と南九州の比較から-

桜井準也

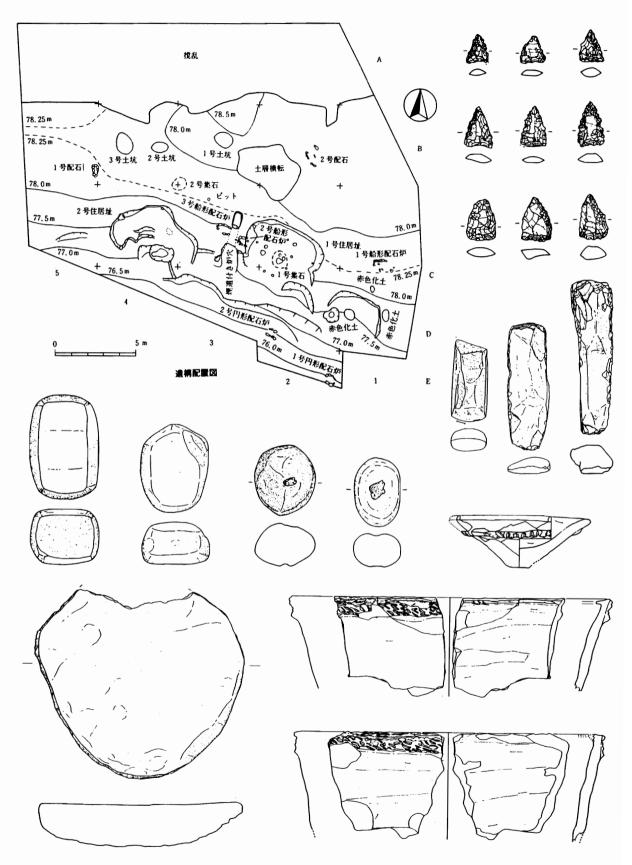
1. 南関東、南九州の草創期遺構

南関東の草創期の遺構は、長い間横浜市花見山遺跡の住居址が唯一の例であったが、その後、東京都前田耕地遺跡や埼玉県宮林遺跡で住居址が発見され、90年代になると、神奈川県慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡、勝坂遺跡、南鍛冶山遺跡、東京都もみじ山遺跡、最近では長野県お宮の森裏遺跡や静岡県葛原沢第IV遺跡など新たな事例が加わった。このように、草創期の住居址は最近になってようやく市民権を得るようになり、今後同様の事例がさらに増加すると思われる。南関東における草創期の住居址の形状は一般的に不整円形を呈しており、構造や付帯施設の検出状況は一定しないが、おおまかに柱穴とみられるピットの廻るタイプと掘り込みを持つ竪穴住居タイプに分類できる。規模は前者が径6~7m程度、後者が径3~4m程度である。現段階では、草創期前半期から隆線文期にかけて両タイプがみられ、爪形文・多縄文期になると竪穴住居に統一されるようである。また、住居址以外の遺構としては、土坑や配石遺構があり、土器集中、石器集中、礫集中、炭化物集中なども検出される。居住地とみられる遺跡の規模は2000㎡程度の規模の大きな遺跡と200㎡程度の小規模な遺跡がある。

これに対し、近年南九州において相次いで発見された草創期遺跡は遺構・遺物とも充実しており、草創期における定住化の問題と絡み注目されている。以下で雨宮瑞生氏の論考を参考に概要を述べる。南九州ではB.P.11000年の薩摩火山灰の下位から多数の草創期遺跡が発見されている。これらの遺跡は草創期古段階(前半期)と新段階(後半期)に区分され、古段階の遺跡として横井竹ノ山遺跡、加栗山遺跡、塚ノ越遺跡、新段階の遺跡として掃除山遺跡、栫ノ原遺跡、伊敷遺跡、東黒土田遺跡、鎌石橋遺跡などがあげられる。遺跡の規模として遺構の分布範囲を測定すると、掃除山遺跡が約300㎡がであるのに対し、栫ノ原遺跡は約2600㎡である。検出された遺構群は多様で、竪穴住居址、炉穴(煙道付き炉穴)、配石炉(船形配石遺構・円形配石遺構)、集石、土坑などがある。特に、掃除山遺跡では竪穴住居跡2軒、煙道付き炉穴1基、船形配石遺構3基、円形配石遺構2基、配石2基、集石遺構2基、土坑3基などが狭い範囲に集中して検出されている(第1図)。また、東黒土田遺跡では堅果類の詰まった貯蔵穴が検出され注目されている。

2. 南関東、南九州の比較と定住化

以上の両地域を比較してみると、居住地と考えられる遺跡の規模は、ともに2000~3000㎡程度の比較的規模の大きな遺跡と200~300㎡程度の小規模の遺跡が存在するようである。検出遺構については、住居址は規模や構造は大差ないが、南九州には煙道付き炉穴が存在し、配石炉や集石などの調理施設が数多く検出されている点は大きく異なる。また、焼土が顕著にみられることは南関東に比べ恒常的施設という印象を与える。次に、両地域の出土遺物について検討すると、南関東の前半期では少量の



第1図 掃除山遺跡の遺構配置と出土遺物

土器、尖頭器や少量の有茎尖頭器、 表1 南関東と南九州の草創期諸属性 削器、掻器、打製石斧、磨製石斧 などに細石刃や細石刃核が伴って おり、後半期の隆線文期では、多 量の隆線文土器に伴って有茎尖頭 器、尖頭器、少量の石鏃、削器、 掻器、磨石、打製石斧などが出土 している。続く爪形・多縄文期で は、爪形文土器や多縄文土器に伴 って多量の石鏃、尖頭器、有茎尖

	 属 性	前南関東	半南九州	後半 南関東	(古) 南九州	後半(新) 南関東
遺構	住居址(ピット) 〃 (竪 穴) 配石遺構(炉) 煙道付き炉穴 土 坑 集 石	\(\triangle \) \(\triangle \	× × × × ×	△○ × × △ ×	×00000	× 0 × × 0 ×
遺物	土 器 石皿・磨石類 石 鏃 磨製石斧	Δ × × Δ	40 0 0	0000	0000	0004
	定住性	Δ	Δ	0	0	0

頭器、削器、掻器、磨石、敲石などが出土している。また、この時期は黒曜石が多用されることが特 徴的である。これに対し、南九州では古段階で少量の土器、多数の石鏃、石皿、磨石、磨製石斧など が細石器に伴って出土し、新段階になると多量の隆帯文土器が出土するとともに石皿、磨石、磨製石 斧の出土量が増加する(第1図)。このうち、石鏃は古段階には多数の石材が用いられ、新段階になる と黒曜石が用いられている。また、土器については新段階になると装飾が発達し、大形土器が出土し、 器種も分化するという特徴がみられる。

以上の検討結果を表1にまとめたが、南九州の草創期古段階において石鏃、植物加工具である石皿 ・磨石類、伐採具である磨製石斧の存在が注目される。また、新段階においては住居址や配石炉など の多様な遺構群、堅果類の詰まった貯蔵穴の存在、多量の石鏃、石皿・磨石類、磨製石斧の出土は、 この地域が定住化という点で他地域に先行していたことを示している。縄文時代草創期は寒冷で乾燥 した氷河期から後氷期へと急激に気候や植生が変化する時代であるが、草創期から早期にかけての南 九州地方は、海岸部を中心に照葉樹林帯に属していたとされている。照葉樹林帯は夏期の高温・多雨 気候で、シイ類・カシ類・クスノキ・タブノキなどが主な構成種となっている。渡辺誠氏によれば、 落葉広葉樹林帯のナラ類は加熱処理、トチは高度なアク抜き処理が必要であるが、シイ類はアク抜き 処理が不要であり、カシ類は水さらしのみで食用となり、南九州草創期人がこれらの堅果類を積極的 に利用していたことは明らかである。当時の南九州は中国南部や東南アジアを中心とする東アジア照 葉樹林帯の北東端にあたり、後氷期の温暖化にともなって北上する南方文化との接点にあたることが わかる。また、草創期前半期の石鏃についても他の地域に先んじて南方から矢毒とともに弓矢が導入 されたことを想像させる。

このように、日本列島の草創期文化は一元的に捉えられるものではなく、南九州における後氷期の 環境適応と定住化の問題は草創期文化を考える上で重要な位置を占めている。

駿豆地方押圧縄文期の遺構と遺物

池谷信之

1. はじめに

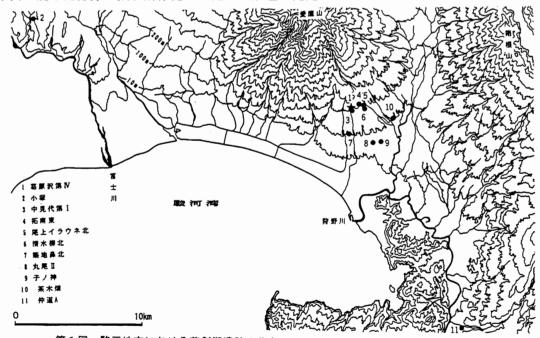
駿豆地方においては近年にいたるまで、草創期の遺構・遺物のまとまった出土例に恵まれず、編年上は空白となっていた。しかし、1983年の大仁町仲道A遺跡の発掘調査を契機として、沼津市清水柳北遺跡・同葛原沢第Ⅳ遺跡・芝川町小塚遺跡などから、特に押圧縄文期の良好な資料が得られてきた。また関野哲夫氏によって既存の出土資料の再検討が行われ、長泉町茶木畑遺跡・沼津市子ノ神遺跡・同丸尾Ⅱ遺跡における絡条体圧痕文土器の存在が明らかとなり(関野1990)、また筆者によって沼津市尾上イラウネ遺跡における隆起線文土器、同築地鼻北遺跡における絡条体圧痕文土器の存在が確認されている(池谷1996)。

特に葛原沢第IV遺跡からは多量の押圧縄文土器(絡条体圧痕文土器)と当該期の住居跡・炉址・土坑が検出されており、当地域における初期定住化の足どりを伺う上で良好な資料を提供している。

2. 葛原沢第Ⅳ遺跡第1号住居

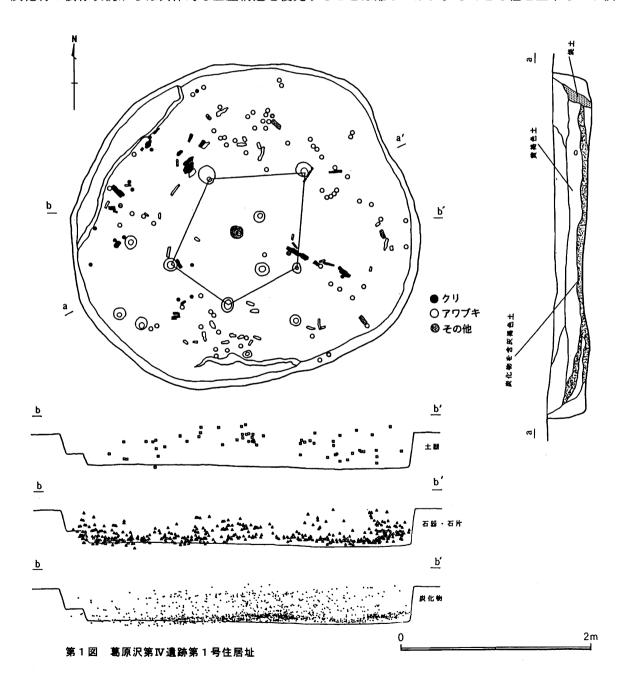
当住居跡については既にその概要を示す機会があり(池谷1995・1996・沼津市文化財センター1995)、極力重複を避けるが、以下の点を再確認しておく。

- ・長径3.6m、短径3.4mの略楕円形を呈し、残存壁高は0.4mとかなり深い。
- ・主柱穴を結ぶラインとほぼ重複して床面の硬化した部分が認められた。
- ・床面の焼けた部分が数ヶ所確認されたが、炉址は発見されなかった。



第1図 駿豆地方における草創期遺跡の分布

- ・覆土中層は黄褐色土となっているが、炭化物以外の遺物が比較的少なく、この層の上面のレベル が住居跡中央に向けてむしろ高くなっていた。
- ・住居跡の床面からは石皿・磨石が出土している。床面・覆土下層からは黒曜石・頁岩の石片が多量に出土している。
- ・床面付近の炭化材の材同定では、柱材にクリ、垂木・横木にアワブキが用いられた状況が伺えた。 覆土中層の黄褐色土は住居の上屋の葺土に由来する可能性を考えておきたい。炭化材の依存状況が 比較的良好なのは、葺土に覆われていたために住居内が炭焼窯に近い状況となったためと想定される。 炭化材の依存状況からは具体的な上屋構造を復元することは難しいが、少なくとも柱と垂木ないし横



木の構造を想定することは可能で、これまでの「草創期の簡便な住居とは一線を画し、比較的長期の居住を考えうる内容を備えている」と評価したことがある(沼津市文化財センター1995)。また柱材に耐朽性のあるクリが用いられていることについては、「既に縄文時代草創期に木材の経年変化を知りうる環境があり、少なくとも複数年の居住を前提としてこの住居が構築された」ものと推定した(同上)。さらに床面上の石皿・磨石の存在や大量の石片の出土は、「主たる生活が遺構内で行われたものではなかったらしい。」「家族単位の居住施設として限定する必要がなく、用途に応じて構築し、時としてして風雨や寒さを防ぐ目的を兼ねた」(白石 1996)と考えられている隆起線文期の「住居状遺構」とは異なり、住居内で一定の生産・消費活動が行われていたことを示すものと考えられる。

3. 初期定住化 へ

こうした状況から、葛原沢第IV遺跡第1号住居址は縄文時代初期定住への確実な足どりを示すものと評価されよう。特に駿豆地方においては、絡条体を横位密接に押圧する地域性の強い土器群が分布し、定住化の進展と土器型式とが協調的なありかたを示している。

しかしいっぽうで、神奈川県下においてはこれまで押圧縄文期のまとまった遺構・遺物の出土は知られていない。隆起線文期の資料の充実とは対照的で、今後調査の進展によっては多少の発見例も予想されるが、この傾向に大きな変更はないものと予想される。さらにこうした状況は表裏縄文期末まで継続するようである。

桜井準也氏は隆起線文期に既に「拠点的居住地」「野営地」「狩猟場」等のセツルメントシステムが形成されていた可能性を指摘し、草創期の居住活動の定着性を強調している(桜井1996)。神奈川県下の隆起線文期に限ってみれば、こうした評価は筆者も賛同するところであり異論はないが、その後の押圧縄文期・表裏縄文期にこの地域が「空白期」に近い状況になってしまうことは、定住化が地域によっては順調に進行しなかったことを示していよう。3月3日に開催された「考古学講座」では隆起線文期の華やかな部分が強調され、このいわば影の部分に注意が向けられなかったのは残念でなことであった。

関東周辺の状況に目を転ずれば、必ずしも押圧縄文期・表裏縄文期は「空白期」とはなっていない。 したがってその理解には、気候変動などの汎列島的な原因ではなく、火山活動やこれが与えた植生・ 動物相への影響等の中地域的な解釈が求められよう。

参考文献

池谷信之他「駿豆地方縄文時代草創期の居住地について一葛原沢第Ⅳ遺跡の住居址と配石遺構から一」『日本考古学 協会第61会総会研究発表要旨』1995

池谷信之「愛鷹・箱根山麓の縄文時代草創期の遺物」『静岡県考古学会シンポジウムIX 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年収録 集』静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会1996

桜井準也「隆線文期の居住活動-湘南-」『考古学講座かながわの縄文文化の起源を探る』神奈川県考古学会1996

白石浩之「縄文時代草創期研究の現状とその課題」『考古学講座かながわの縄文文化の起源を探る』神奈川県考古学会1996

関野哲夫「静岡県東部地方における縄紋草創期前半の石器について一愛鷹南麓の最近公表された資料一」『縄文時代 1』 縄文時代研究会1990

沼津市文化財センター「日本の遺跡 静岡県葛原沢第Ⅳ遺跡第1号住居跡」『考古学研究 42-3』1995

最終氷期末期に起きた寒冷期への逆戻り=「寒のもどり」とその急激な終末

增渕和夫

1. 新ドライアス期 (Younger Dryas time)とは

最終氷期から現在にいたる温暖化の過程は、漸次的なものでなく、短い周期の激しい変動を伴ったものであることが、最近明らかとなりつつある。そのような短周期の変動のなかでもとりわけ注目されているのが、最終氷期末期に起きた急激な寒冷化イベントである。この寒冷期は、新ドライアス期と呼ばれ、時代は約1万3000年前頃~約1万700年前頃とされている。日本では新ドライアス期は、「寒のもどり」とも呼ばれている。

グリーンランドや南極の氷床は、過去の地球環境、特に気候変動を探る上では、絶好の試料を提供してくれる。これら氷床の中央部は低温で乾燥しており、降り積もった雪は、融解や消耗を受けることなく凍結保存され、過去数十万年の環境変動の復元を可能にしてくれる。グリーンランドでは、1960年代にキャンプセンチュリー、1970年代末にダイスリーで深層コアボーリングが行われ、さらに1990年代になって中央部のサミットで2本の深層コアボーリングが行われた。キャンプセンチュリー、ダイスリーの氷床深層掘削コアの酸素同位体比を基に、北半球の極地域における過去10万年間の気候変動が明らかとなっている。いずれのコアからも、現在につながる過去1万年間(完新世)の酸素同位体比は、それ以前の即ち最終氷期のそれに比べて高い。これは温度に換算すると約10度に達すると見積もられ、氷期には平均気温がかなり低かったことを示すと考えられる。両コアからは最終氷期から完新世の温暖期の移行期に、急激な酸素同位体比の変動がみられるが、この変動中の寒冷期が、先述した新ドライアス期である。

最近 (Dansgaardほか, 1993)、ダイスリーコアについての詳細な酸素同位体比の検討から、新ドライアス期末 (Hammerほか, 1986によれば10, 720±150年前)には、わずか50年で気温が7度も上昇したことが明らかとなった。また、過剰重水素 (d) およびダストの変化が約20年で起こっており、このことは、新ドライアス期寒冷期中に中緯度まで張り出していた海氷がわずか20年で後退し、ダストをもたらす寒冷期中の暴風状態も短期間で収拾したことを示すとされている。さらに、米国グリーンランド氷床掘削プロジェクト (GRISP2)によるサミットでの氷床コアの雪の蓄積率変化から、Alleyほか(1993)は、わずか3年で新ドライアス期末に雪の蓄積率が変化したことを示している。気候が寒冷化した時には蓄積率は低く、温暖期には蓄積率は高い。降雪量の急激な増加がその地域の上空の飽和蒸気圧の増加によるとすれば、降雪量の変化を引き起こした気温上昇は7度に達すると見積もられており、これは先のDansgaardほか(1993)の気温上昇と良く一致している。但し、Alley他は、新ドライアス期の終末期を11,640±250年前としている。

このようにして、新ドライアス期には短期間(約2000年間)ながら、氷期への逆もどりが起こり、さらに気温変化ではわずか50年で温暖期へ入れ替わったことになる。新ドライアス期の終末とは、現在

へと直接つながる温暖期(完新世)の始まりを意味することになる。

2. 新ドライアス期のヨーロッパ

新ドライアス期の存在は、元々、ヨーロッパ大陸の気候変動の復元から明らかとなったものである。デンマークの花粉分析からは、新ドライアス期に先行する温暖期アレレード期には、7月の平均気温は $13\sim14$ °C、年平均気温は現在より $2\sim4$ °C低く、新ドライアス期では、年平均気温でアレレード期に比べ $2\sim6$ °C低下し、7月の平均気温は約10°Cと見積もられている。植生は、アレレード期に分布した高木性のマツ・カンバの疎林は、新ドライアス期に入って、南下し、再び、草本性植物やチョウノスケソウ(Dryas octopetala)が支配的となっている(ドライアイス期の命名は、チョウノスケソウからである)。

フランスのドフィーヌ (北緯45度)の沼地から採取したコアの花粉分析と酸素同位体分析を組み合わせたEicherほか (1981)の研究では、約1万500年前~1万3000年前にかけては、δ¹80は低く、低温であることを示し、ヨモギ属の多い草原植生の広がっていたと推定されている。その後、約1万2300年前にかけて、δ¹80は増加する。この増加は、平均気温で約7℃の上昇と見積もられている。δ¹80の増加に応じてカバノキ属が増加する。δ¹80は約1万2300年前のピークから約1万500年前での最低値まで減少する。植生はカバノキ属と後退して北方系のマツ属が優先する森林が形成される。さらに約1万500年前頃のδ¹80 が最低値に達した時には、カバノキ属、マツ属とも減少し、ヨモギ属がやや増え、マツ属の疎林になったと推定されている。その後、δ¹80は約1万年前にかけて急増、以後漸増し、カバノキ属、マツ属が減少、ハシバミ属が増大する。ここでの編年は層序学的方法によるが、δ¹80の変動と花粉分析の結果はよく対応しており、新ドライアス期に相当すると考えられる約1万2300年前から1万500年前にかけての寒冷期の存在と、寒冷期の突然の終末という特徴も明らかである。また、アレレード期に後退した氷床の顕著な再前進が、ヨーロッパ各地で知られている。

3. 新ドライアス期の日本

東京湾に面する低地の沖積層の研究において、沖積層は2層に区分され、下部層は7号地層、上部層は有楽町層(青木1969)と呼ばれている。7号地層と有楽町層は不整合関係にあり、遠藤ほか(1982)は有楽町層の基底の砂礫層や礫まじり砂層をHBGと命名し、HBGは7号地層を-45~-50mまで浸食しているとしている。松田(1993)によれば、約2万年前~1万5000年前の最終氷期極相に、東京湾域では埋没谷底が形成され、谷底に基底礫層BGが堆積した。このとき海水準は現在に比べ100m以上低下した。その後有楽町海進が起こり、1万5000年前頃には-70m前後、1万2000年前頃には-40mと海面は上昇するが、約1万1000年前後に-50m前後まで海面は低下する。三角州地帯では、この時の海面低下によって、7号地層が浸食され、有楽町層との境界となる不整合面が形成され、形成された谷底にHBGが堆積した。この海面低下期が新ドライアス期に相当すると考えられる。

尾田ほか(1992)は、四国沖、遠州灘沖、房総沖、鹿島灘沖の4海域より採取したコアの浮遊性有孔虫化石群集の垂直的分布から、過去2万年間の黒潮流路の変遷を推論している。2万年前~1万6000年前には、西南日本沖の黒潮の流路は現在より南にあり、四国沖、遠州灘では冷水塊が頻発し、1万5000年前~1万4000年前には、黒潮は西南日本沖で大きく蛇行し、黒潮前線は房総沖にあった。その後1万1000年前までに西南日本沖では黒潮の影響が強まり、1万年前~9000年前には黒潮の流軸は本州に近づき、黒潮前線も北に移動、9000年前~6000年前には黒潮はさらに西南日本に接近し、黒潮前線は6000年前に最も北上した。5000年前以降、黒潮は西南日本沖で現在の流路に近づいたが、4500年前~1500年前には、房総沖や鹿島灘沖で冷水塊が発達したとしている。さらに、房総沖、鹿島灘沖では、親潮要素の有孔虫 Neogloboquadrina pachyderma の産出のピークが1万1000年~1万500年前頃にあることから、過去1万2000年間で最も親潮の影響が強まった短期的な寒冷化の事件が起きたとされている。この短期的寒冷期は新ドライアス期に対応すると考えられている。

以上から、東京湾及び周辺域では、1万1000年前後に、海面低下期(-50m前後)があり、ほぼ同時期 に日本列島太平洋域では短期的な寒冷化事件が起きており、これらはいずれも、新ドライアス期の寒 冷化に対応すると考えられる。

日本の内陸部特に平野部では、ヨーロッパでみられるような古環境復元を含めた新ドライアス期の様相は、現時点では明らかとなっているとはいえない。これは、HBGの堆積にみられるように、浸食活動の卓越によって古環境復元が可能な良好な試料が検出されていないことによると思われる。

約1万6000年前から約1万4000年前の晩氷期の多摩丘陵の古環境を明らかにした川崎市麻生区の鶴見川開析谷での報告(増渕1992、上西ほか1992)でも、約1万4000年前以降、礫や材片、偽礫を含む砂層の堆積があって古環境の復元ができず、唯一約1万1000年前頃の1試料の花粉分析は、約1万6000年前から約1万4000年前とほぼ同様のトウヒ属、マツ属、ツガ属、モミ属、カバノキ属、ハンノキ属などからなる冷温帯から亜寒帯の針広混交林の形成を示している。増渕(1992)は、約1万4000年前から約1万年まで冷温帯から亜寒帯の針広混交林が継続した可能性を示唆しているが、約1万4000年前頃を境にして下部と上部に沖積層が区分され、両者は斜交関係にあることなどを考慮すると、古環境の継続よりも約1万4000年前以降に何らの環境変動が起きたと考えるほうが妥当と思われる。

多摩川左岸域の東京都小金井市中町の立川面上に位置する野川中州北遺跡(パリノ・サーヴェイ1989)では、約1万5000年前~1万3000年前(第Ⅱb植物化石層)にトウヒ属、マツ属、カラマツ属-トガサワラ属、スギ属などの針葉樹の優占する森林が形成され、約1万3000年前~1万2000年前頃(第Ⅲ植物化石層)にコナラ亜属が最優占し、ハンノキ属、シナノキ属、トネリコ属、ガマズミ属などの冷温帯性の落葉広葉樹が優占する森林へと変化している。これは、気候の温暖化に伴い、針葉樹が衰退し、落葉広葉樹が分布拡大したと推定されている。残念ながら約1万2000年前以降、第Ⅲ植物化石層より上位は縄文時代~中世の黒ボク土が覆い、約1万年前前後の植生は明らかとなっていない。ここでの年代観が確かならば、新ドライアス期に先立つ温暖期アレレード期の植生を第Ⅲ植物化石層は示しているとも考えられれる。

いずれにしても、最終氷期極相期の終わりから、完新世にかけての植生変遷については、平野部では断片的情報しか持ちえていないのが現状と言える。

本稿を執筆中、叶内敦子ほか(1996)によって極めて注目すべき情報が寄せられた。叶内ほか(1996)は、長野県の八島ヶ原湿原(北緯36°)における8本のボーリングを行い、最終氷期から完新世にかけての植生変遷の詳細を明らかにしている。これによれば、針葉樹類花粉が優占する→落葉広葉樹類の増加→カバノキ属と針葉樹類の増加→落葉広葉樹類の増加と植生が段階的に変化している。これらはヨーロッパでみられた段階的植生変遷とよく対応し、最終氷期極相期→温暖期(アレレード期か)→寒冷期→温暖期(完新世)に対応する変化と考えられる。カバノキ属と針葉樹類の増加する寒冷期が新ドライアス期に相当し、約1万900年前~約9400年前頃とされている。この絶対年代については補正されていない値であることや、植生応答時間も考慮すべきと思われる。

新ドライアス期を示す資料が少なく、その年代については明確にしていかなければならないが、日本においても新ドライアス期=「寒のもどり」が存在したことはほぼ明らかと言える。今後は、平野部においても晩氷期から完新世にかけての連続した古環境復元が可能な堆積物の検出に努め、新ドライアス期という極めて短期的な寒冷期と、縄文時代以降人類の経験したことのない数十年での急激な温度上昇による劇的なその終末のより具体的な様相の解明を行うことが重要である。

引用文献

- 青木 滋「東京低地の第四紀層について」『日本地質学会第76回学術大会シンポジウム「海岸平野資料集』日本地質学会1969 Dansgaard, W., S. J. Jonsen, H. B. Clausen, D. Dahl-Jensen, N. S. Gundestrup, C. U. Hammer, C. S. Hvidberg, J. J. P. Steffensen, A. E. Sveinbjornsdottir, J. Jousel and G. Bond「Evidence for general instability of past clomate from a 250 kyr ice-core record」『Nature, VOL363』1993
- Eicher, U., Siegenthaler, U. & Wegmuller, S \(\text{Follen} \) and oxygen isotope analyseson late-and post-glacial sediments of the Tourbiere de Chirens (Dauphine, France) \(\text{\(\text{\(\text{U}\)}\) \(\text{\(\text{\(\text{U}\)}\) \(\text{\(\text{\(\text{U}\)}\) \(\text{\(\ext{\(\text{\(\text{\(\text{\(\text{\(\etit\}\\ \text{\(\ext{\(\text{\(\text{\(\ext{\(\text{\(\exi{\(\text{\(\text{\(\ext{\(\text{\(\text{\(\ext{\(\ext{\(\text{\(\ext{\(\ext{\(\chince{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\exi{\) \\exitin\) \ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\)}\\ \ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\) \}\}}\\ \ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\\ \ext{\\ \)}\\ \\ \ext{\\ \ext{\\ \ext{\) \ext{\(\ext{\(\ext{\(\ext{\\ \)}\\ \ext{\\ \ext{\} \\ \ext{\\ \ext{\\ \ext{\| \ext{\\ \chi\}\}\\ \ext{\\ \ext{\) \\ \ext{\\ \exi\\ \ext{\\ \chi\}\\ \ext{\| \ex
- Endo, K., Sekimoto, K. and Takano, T. 「Hlocene stratiguraphy and paleoenvironments in the Kanto Plain, in relation to the Jomon Transgressio」 『Proc. Inst. Natural Science, Nihon Univ. Earth Science, vol. 17』日本大学1982
- Hammer, C. U., H. B. Clausen and W. Dansgaard | Greenland ice sheet evidence of past-glacial volcanism and its climatic impact] [Nature, VOL288] 1980
- **叶内敦子・杉原重雄「八島ヶ原湿原堆積物の年代と花粉分析による最終氷期から完新世にかけての環境変遷」**『日本第四紀学会第26会大会講演要旨集』日本第四紀学会1996
- 上西登志子・山口惇「麻生沖積層の更新世末期および完新世の花粉化石群集」『麻生環境センター内第2次古環境調査報告』 川崎市1992
- 松田磐余「東京湾とその周辺の沖積層」『東京湾の地形、地質と水』築地書館1993
- 増渕和夫「麻生沖積層の総合的古環境調査」『麻生環境センター内第2次古環境調査報告書』川崎市1992
- 尾田太良・嶽本あゆみ「浮遊性有孔虫からみた黒潮流域における過去2万年間の海洋変動」『第四紀研究 31-5』第四紀学会1992
- パリノ・サーヴェイ「野川中州北遺跡植物化石層の堆積環境と植生」『東京都小金井市野川中州遺跡-自然科学分析編-』小金井市遺跡調査会1989
- R. B. Alley, D. A. Messe, C. A. Shuman, A. J. Gow, K. C. Taylor, P. M. Grootes, J. W. C. White, M. Ram, E. D. Waddington, P. A. Mayewski, G. A. Zielinski [Abrupt increase in Greenland snow accumulation at the end of the Younger Dryas event]
 [Nature, Vol. 362] 1993

かながわの縄文時代のはじまり

白石浩之

はじめに

かながわの縄文時代草創期の内容を、より多くの方々にご理解いただくために、わかりやすく解説 します。

1. 旧石器時代終末

今から1万年より前はわたしたちの住む地球は現在の気温より5~6度も低い寒い氷期でした。その頃の人々は石を打ちかいて作った石器やけものの骨や芽を加工していろいろな道具を作っていました。しかし食物を煮たきする土器はいまだ用いられていませでした。この時代をわたしたちは旧石器時代と呼んでいます。

日本の旧石器は今からおおよそ50万年前に始まるとも言われています。旧石器時代が終わる頃、つまり今から14,000年頃は多く作られていたナイフのようなかたちをした石器は影をひそめ、長い鉛筆や短い鉛筆のような大小の石の槍や長方形のカミソリの刃のような細石刃を作って、尖がった軸のわきにその細石刃を複数をめこんで組合わせ道具としてヤリとして利用しました。時にはこの細石刃と石槍の両方を用いることもありました。

2. 土器の出現

約12,000年前に土器の出現をもって縄文文化の始まりとするならば、土器の役割が今までの生活に見られなかった点を考えねばならないでしょう。最も古い土器の表面にはススがついています。これは食べ物を煮炊きしたもので、なま、焼く、蒸すに加えて、煮ることが出来るようになり、食生活の画期的な変化であったと見てよいでしょう。

3. 隆線文土器以前

神奈川県の相模川両岸にはいくつかの高さの異なるひな段が形成されています。これをわたしたちは相模野台地と呼んでいます。この台地上には旧石器時代から縄文時代の最も古い時期の遺物が豊富に出土しています。この台地を形成した火山灰は赤土の降り積もった後、黒土におおわれますが、今まで最も古いと考えられてきた土器は口の部分に粘土の紐を数本めぐらせた隆線・文土器と呼ばれる丸い底の深鉢形や石の槍の一種で、ねもとの近くにエラが張ったようなかえりがある有舌尖頭器や磨かれた斧などが赤土の上の黒土のなかから出土しました。しかし大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点ではこの隆線文土器の下の赤土(関東ローム層)の上部から先に紹介した大きな槍と磨かれた石斧そして細石刃に加えて文様のない土器片が伴って発見されました。つまり隆線文土器より古い土器が確実に認められたのです。このような事実によって、綾瀬市寺尾遺跡出土の石器と土器がもう少し古く

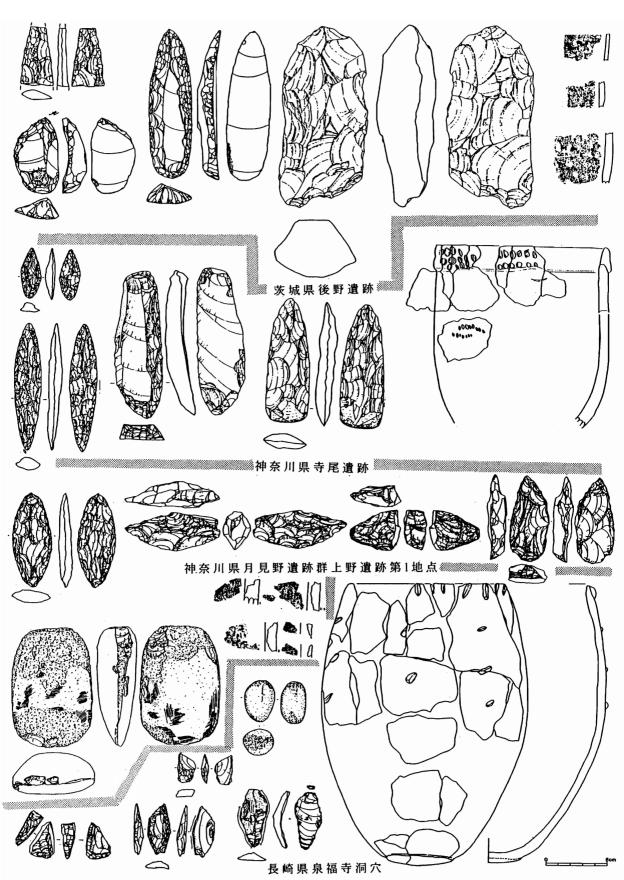
なることがわかり、縄文時代の中では県下で最古級の遺跡に見直されています。この遺跡からは多くの石槍と形のよい縦長剥片を素材としたモノを削る道具である掻・削器、片刃のかまぼこ形ないし台形の横断面をもち打ちかいただけの石斧や磨かれた石斧が出土しました。これらの石器群は長野県神子柴遺跡や青森県長者久保遺跡で出土する石器に似ていることから、いわゆる神子柴・長者久保系石器群の仲間であることが分かってきました。問題は土器で口の部分がふくらんで、胴との境で段差になっています。文様は縄の先端と折り曲げた側端部の文様にもみえます。中には口の部分と交じわるように、細長い溝が何本も縦に短く付けられていました。また大和市に相模野№149遺跡があり、この遺跡から出土した遺物も寺尾遺跡の遺物に類似しています。しかしこの土器は段の上に押し付けた文様が隆線文土器の文様に類似しており、時期的には寺尾→相模野№149→隆線文土器になるように思われます。隆線文土器以前に位置付けられる遺跡は勝坂遺跡、清川村の宮ケ瀬遺跡群北原遺跡等でも出土しています。ただし口の部分には残念ながら文様は認められませんでした。このように、相模野台地のみならず、県北の山間部からも最も古い縄文土器や石器が出土しております。今後さらに神奈川県内で、古い土器が発見できる日もそう遠くではないでしょう。

4. 隆線文土器

今まで発見されている隆線文土器は小片で、しかも少量なので、詳細なことはわかりませんでしたが、横浜市花見山遺跡では多くの隆線文土器が復元され、花見山式土器を隆線文、隆線文とハの字形が形文、ハの字形爪形文、無文、斜格子曽文の五つの文様に分け、そして隆線の太さや条の数に応じて、3段階に分けています。花見山遺跡は花見山2式土器が中心です。特に隆線文とハの字形爪形文の文様のついた土器が同時期か否かという点です。このことは隆線文の間に付けられているハの字形爪形文の在り方から同時期の可能性が高いと言えます。しかしこれだけハの字形爪形文土器にヴァラエティーがあると、もっと古い時期のハの字形爪形文土器がありそうです。また隆線文土器の中では2条の隆線に垂れ下がる1本の隆線、つまり郵便(〒)の記号の隆線文土器は、最も古く推定する研究者もいましたが、花見山2式の2条の隆線に垂れ下がる隆線に替わってハの字形爪形文の例は同型ですので、再検討が必要です。花見山式土器の変化は今後は良好な住居内から出土した一括した遺物を基本として、花見山式土器の分類が正しいか否か検討する必要があるでしょう。

5. 発見された遺構と定住化のきざし

今から約12,000年前の人々は花見山遺跡や湘南藤沢キャンパス内遺跡で見られるように、竪穴状の住居や複数の四角形になるような柱穴(ピット)群そして貯蔵のための大きな穴、火焚き場などを利用するようになりました。また石器を穴の中に埋めこんだり、大きな石の下に石器を重ね、隠し置き、必要時に取りだすような、いわゆるデポ(埋納遺構)の事例は、旧石器時代終末には例のないような遺構であることから、縄文時代の初頭のひとびとは少し生活にゆとりがでてきたように思われます。旧石器時代では一定の場所に居住するような生活はなく、移動生活が中心で、一時期にはムラに集合し、



第1図 日本における縄文時代最古級の遺跡と遺物

いつもは分散してキャンプ的な生活をしていましたが、縄文時代の初頭になると、定住していこうとするきざしが先に紹介した遺構の発見によって推定されます。特に竪穴状遺構や柱穴遺構の存在そして近くに設けられたいろりなどがその点を物語っています。

6. 日本歴史からみたかながわの縄文時代草創期

長崎県敦福寺洞穴では細石器に伴って豆粒文土器、隆線文土器、爪形文土器そして押引文土器が出土しました。同じ長崎県福井洞穴からは隆線文土器や爪形文土器にもこの細石器が伴っていましたから、西北九州では豆粒文土器の時期からかなりながい期間細石器が主要な道具に使われていたのです。しかし本州地方では石橋が中心であり、大きく文化の内容に差があったものと考えられていました。つまり九州地方と本州地方では同じような顔つきをした土器が出土しますが、それに伴う石器が大きく異なっています。最近相模野台地では細石器が石槍に伴う例が見られるようになり、両地域を埋める共通性が分かってきました。おそらく九州地方では今後石槍が細石器に共伴する例が注目されてくるものと推測されます。

おわりに

かつて、縄文時代研究の大家山内清男先生は、縄文土器の起源を大陸に求めました。かながわで調査された縄文時代の最古級の遺物も、たまには大陸にも目を向けてみる必要があるでしょう。

主要参考文献

坂本 彰『花見山遺跡』港北ニュウータウン地域内埋蔵文化財調査報告XVI 1996 白石浩之「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告18 1988 藤沢宗平・林茂樹「神子柴遺跡 第1次発掘調査概報」『古代学9-3』1961 麻生 優篇『泉福寺洞穴の発掘記録』1984 ほか

『かながわの縄文文化の起源を探る』討論会の内容

1. 討論会の経過

1996年3月3日に神奈川県民センターで開催された神奈川県考古学会主催の考古学講座『かながわの縄文文化の起源を探る』での討論会は250名以上の会員および研究者の参加者があり、盛会でした。

先ず、白石浩之により、日本における縄文時代草創期についての研究の現状と課題が述べられ、 1縄文草創期前半の土器の再検討、2神子柴・長者久保系石器群の範囲、3集落論研究、4古環境 (主として自然環境や石材面について)の4点が主要な課題としてあげられた。

その後、1かながわの縄文時代草創期文化として、坂本彰が「花見山式土器とその周辺-南武蔵-」、桜井準也が「隆線文期の居住活動-湘南-」、村澤正弘が「いわゆる隆線文土器以前の様相-県央-」、諏訪間伸が「神奈川県西部の現状」、2かながわの縄文時代草創期の古環境として、柴田徹が「かながわにおける縄文時代草創期の使用石材」、増渕和夫・上西登志子が「植生を中心とした縄文草創期の自然環境」と題して事例発表し、その後に討論会を行った。

討論会のパネラー及びコメンテイターは、坂本彰・桜井準也・村澤正弘・諏訪間伸・柴田徹・増渕和夫(以上パネラー)、織笠昭・鈴木保彦・鈴木次郎・戸田哲也・小林謙一・諏訪間順・加藤勝仁(以上コメンテイター)で、司会は白石浩之が行った。なお、当日会場にて池谷信之・可児通宏・大貫静夫の各氏からコメントをいただいた。最後に神奈川県考古学会会長岡本勇の講評を鈴木重信が代読して、盛会のうちに終了した。

2. 討論会の成果

- 1 土器の再検討(村澤正弘、坂本 彰、桜井準也、戸田哲也、鈴木次郎、小林謙一)
- 1. 神奈川県最古の土器は何か

寺尾遺跡第 I 文化層と相模野No149遺跡L1S層上部の遺物が、(1)隆線文土器より古期とする説と (2)隆線文土器の仲間であるとする説に分れた。

(1)隆線文土器以前説

a 口縁有段部の形成は口縁を肥大化させたもので、隆線文の隆帯の作り方とは異なる。 b 有舌尖頭 器以前の神子柴・長者久保系石器群よりなる。

(2)隆線文土器説

aロ縁部の加飾に共通性。b土器を中心として考慮すべきである。c 寺尾遺跡や相模野No149遺跡と、隆線文土器の刺突に共通性が見られる。d層位差が約15cmで、ほとんど差はない。e獣毛痕は花見山式にも認められるので、古式土器の根拠にならない。f相模野No149遺跡の口縁部は隆線文土器の隆線と同様か、隆線文土器の隆線文に発展するもの。

2. 花見山式土器(花見山1式・2式・3式土器)の提唱について、その分類の本質と問題点

a 多量に出土した花見山2式土器を中心に据えると、1式と3式が区分できる。 b 花見山式土器のみで、隆線文土器全体を包括できるものかどうか。 c 花見山式土器は戸田哲也が指摘するように、一時期だけなのかどうか。 d 藤沢 I a期と花見山1式は共通性もあるが、ハの字形爪形文が同時施文されている。

Ⅱ石器の組成と様相(坂本 彰・村澤正弘・織笠 昭)

(1)隆線文土器以前 細石器、尖頭器、削器、石錐、片刃石斧、楔形石器、(2)隆線文土器 有舌尖頭器・石鏃・片刃石斧等、(3)神子柴・長者久保系石器群の再検討①組成からみると、神子柴・長者久保系石器文化になじまない石器も目立つ。神子柴・長者久保系石器群といえるのかどうか。②削片系の細石器との関わり方。

Ⅲ石器と石材との関係(柴田 徹・坂本 彰・諏訪間伸・諏訪間順)

(1)鶴見川流域の石器は総体的にチャートが目立つ。県下の有舌尖頭器はガラス質黒色安山岩が目立つが、慶応藤沢校地内では硬質細粒凝灰岩、花見山遺跡ではチャートが卓越している。(2)細石器は、LIH層上部では柏峠産黒曜石、BO層では神津島産黒曜石、BO層上部からLIs層下部・中部では凝灰岩等の在地産、LIS層上部から漸移層では箱根産安山岩(削片形の細石核)が顕著である。有舌尖頭器は、FB層下部で安山岩が主体の中にチャートが入ってくる。石鏃は、漸移層からFB層でチャートといった入手石材の変化がみられる。

Ⅳ遺跡の分布(桜井準也・坂本 彰・村澤正弘・諏訪間伸・加藤勝仁)

- (1)大和市内では隆線文土器以前の遺跡が多い。(2)隆線文土器になると藤沢市南部に多くなる。
- (3)河川上流域から中・下流域に分布、河川に沿った分布から面的に広がる。(4)立地は①台地の河川縁辺に分布するもの、②低地に分布するものがある。(5)用途的には ①生活址、②狩猟地、③製作址に遺跡が分けられる。(6)石器製作址は大量に製作、交換財とする。(7)一時期に多くの人があつまって生業するために、多くの石器が必要とされる。これは流通経路と関係するのか。

Ⅴ遺構の種類(桜井準也・坂本 彰・村澤正弘・鈴木保彦)

(1)湘南の事例では草創期前半~隆線文土器の時期には、①柱穴状と②竪穴状ものがある。(2)隆線文土器の段階は土地に対する定着が強まっている。(3)爪形文土器~多縄文土器の段階になると、竪穴状の住居が多く見られ、炉址も明瞭になる。(4)配石遺構はテントの重しにする。(5)土坑は墓壙や貯蔵穴か。(6)南九州地方では多用な事例がある。

VI 遺跡の性格(桜井準也)

(1)用途として、居住地、キャンプ地、狩猟地に区分される。(2)遺構は住居状、ピット状(テント状の遺構)として残される。この時期の集落形態の把握が必要である。

VII古環境(増渕和夫)

(1)鶴見川の礫は上総層群から運ばれたもの。海面も下がっていた。UG(14,000年前)の下から検出したシラビソの大形遺体、花粉は針葉樹が優先、トウヒ属、モミ属、カラマツ属、ツガ属、コナラ亜属。

(2)14,000~13,000年前はアレレード期で温暖期、13,000~11000年に寒の戻りといわれるヤンガードライアス期、そして11,000年以降温暖期になる。このように縄文草創期は自然環境は大きく変化している。針葉樹から広葉樹、激しく気温が変る時期である。

₩ かながわの旧石器時代から縄文草創期の転換(坂本 彰・村澤正弘・桜井準也・諏訪間伸・柴田 徹・増渕和夫)

- (1)立地の差異。(2)遺構の検出例が増える。(3)ものを意識的に片付ける行為。(4)河川魚撈。
- (5)丸底はごとく石を置くことにより持熱効果。(6)土器の出現。(7)かならずしも内水面魚撈のみではなく、採集に比重が多い。(8)全てのものが変化するのではなく、あるものは変り、変らないものもある。(9)温度が50年以内で7度も上がっている。環境が変化した時期。(10)低地への調査への注目。(12)該期は世界的に変化する。

IX会場でのコメント

- (1)静岡県の池谷信之さん 葛原沢遺跡の住居址は40cmの掘り込みがあり、くり材を使用している。 定着性が高まる。縄文土器がどこまで遡るのかを意識して考慮すべきか。
- (2)東京の可児通宏さん シベリヤでも類似した細石器が出土。大陸での土器は平底、北海道や九州は平底である。勝坂遺跡の土器の条痕文はアムールによく見られる。もしかすると平底で、穴があいた口縁部の可能性があろう。
- (3)東京大学の大貫静夫さん 伝播論なしで地域性を考えるのは良い。環日本海の中で捉らえることがよい。シベリヤの範囲は広い。ヤンガードライアス期を東アジアで何か考えられないか。

X講評(岡本勇)

学史的に観て、本日の討論会の意義と学問の追求への姿勢を深く考えさせる講評で、会場は多くの 参加者が感動していたものと思われる。なお講評は別項に掲載した。 (文責 白石浩之)

『かながわの縄文文化の起源を探る』講評

岡本 勇

神奈川県考古学会主催の本日の討論会にご出席下された多くのみなさん、ならびにパネラー、コメンテイター、その他関係者のみなさん、休日であるにもかかわらずご出席を賜り、熱心に討論をたたかわし、この集会を実り多いものにされつつあることに、心より敬意を表わすものであります。私は、最後に講評の責を果たさねばならぬことになっておりましたが、身体に障害があり、歩行も困難なため、欠席せざるを得ない破目になりました。この点申し訳なく、心からお詫び申しあげます。

書面を借りて若干の所見を述べ、私の責をふさぎたいと思います。想えば、今から50年前、敗戦直後のころ、考古学の道を志し、どの方面のことを勉強しようかと考えあぐねていたところ、縄文文化の起源をテーマにしてみたいという考えに落ち着きました。高天ケ原の神々の物語などは、もう信ずるに価するものではないことは明白でした。しかし、それにかわって何を歴史認識のよりどころとすべきかで、悩まざるを得ませんでした。「ものの本質は、もののはじまりから解明されてゆく」という、さる歴史家の言葉を全面におし立てて、縄文文化の研究を志し、そのためにも起源の問題が必須の課題とならざるを得ませんでした。そして現実には、編年上で最も古い土器にターゲットが絞られていきます。46・47・48年といった敗戦後の灰色の日々、撚糸文土器を求めて遺跡を訪ねる日々が続きました。三浦半島から多摩丘陵、武蔵野台地、北伊豆といった地域に歩を運びました。そして学部を卒業するときは、「撚糸文系統土器群研究への序説」というタイトルの卒論を仕上げました。この頃、夏島貝塚の発掘、大丸遺跡の調査、さらには岩宿遺跡の発掘、ひきつづく「無土器文化」の日本各地での存在などによって、私の初志も大きくゆれ動くことになります。

いま半世紀にわたる縄文文化起源論の歴史をふりかえってみると、当然のことかもしれませんが、編年上の最古の土器、遺物が問題となり、そのハイマートがどこであるかが問われてきました。昭和初年代後半には三戸式、田戸式などが登場し、シベリアのカムケラミークとの関連がとりざたされました。昭和十年代中頃、あらたに稲荷台式土器が発見され、田戸式などとの相異から南北二系統論が主張されたのは、ご存知のとおりです。また、その後昭和三十年代のはじめ、新潟県小瀬ヶ沢洞穴が発掘され、簾状文凹窩文などの特殊な土器と縄文離れした石器群がみつかり、話題を呼ぶことになりました。

ついで長崎県福井洞穴の発掘があり、爪形文、隆線文の土器が層位的に出土し、また両者に細石器の伴うことが知られました。この福井洞穴の文化を芹沢長介氏は、中国東北部のオロスの文化に比較されたことがありました。さらに長崎県泉福寺洞穴ではあらたに豆粒文土器が発見され、細石器との関係も追認されました。一方、神奈川県大和市の上野遺跡では、関東ローム層中より無文の土器細片が細石器とともに出土するという事実が知られました。

ここにおいて起源問題の鍵の一つが、関東ローム層内にあることが歴然とし、また無文土器に眼を向けるべきであることがはっきりしたわけです。近年、県内各地からいわゆる草創期の土器、別のいい方をすれば始源期の土器、石器の出土が相次ぎ、かつての時代とは研究状況は大きく変りました。こうした状況のなかで、私は一人の研究者の研究姿勢を紹介し、今日的な意味を考えてみたいと思います。

カーレンフェルスといえば、キクナニアンの命名者としてその名が知られております。

フォン・スタイン・カーレンフェルスは1920年代のはじめ、オランダの貴族の家に生れました。アムステルダム大学で考古学を学び、その後セレベスにあった博物館に勤務し、1933年から34年にわたり、また1937年にもセレベス島の南部にあるトアラ洞穴の調査に従事します。この洞穴の特徴的な遺物は、縁をきれいに鋸歯状にした石鏃と骨鏃(有刺鏃?)であり、その上層には細石器が多数みられました。これらの細石器をカーレンフェルスはオーストラリアの細石器と関連ありと考えました。さらにその上層にはバクソンタイプの礫器がみられたといいます。カーレンフェルスが最も注目したのは有刺鏃であり、彼はそれを遠く日本から波及したものと考えました。この考えを実証するために、ベトナム、フィリピンなどを調べ、そして昭和10年に日本にやってきます。そして東京、京都、九州、東北の各帝国大学の資料をつぶさに見学し、帝室博物館、大山史前学研究所なども訪ねました。そして日本にも有刺鏃の存在することを確認するのであります。そして大山史前学研究所でトアラ洞穴出土の礫器の類品を手にし、たまたま発掘が予定されていた菊名貝塚にも歩を運ぶに至るのです。そして、そこで目にした礫器にキクナニアンの名称を与えるのであります。神奈川考古2号にカーレンフェルスをドイツ人としていますが、これはまちがいです。国籍をまちがえるのは失礼なことです。

一つの石器の母なる地を求めて、アジア太平洋の地域を熱心に調べ続けた彼の執念には驚くばかりであります。

体重180キロの巨漢のカーレンフェルスは、すでに世にありませんが、彼の学問的情熱とそれによって生れた課題に思いをはせ、そこから多くのことを学びとらねばならないと思います。

『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探るパートⅡ』

発 行 神奈川県考古学会

編 集 白石浩之・村澤正弘

発行日 1996.10.15

印 刷 長谷川印刷